

日本書紀傳 十卷<sub>七</sub>

和書  
一〇五二二號

二一四

内一六六八三號

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (33)
函號	特 85 1



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





教部省  
文庫印

皇極經世一  
皇極經世一

南政官  
皇極經世一

皇極經世一

由ふり然れば被除ハ上件被戸神の成出給へる小終  
りたるを猶<sup>カヘ</sup>反復<sup>ヒ</sup>海底小入給ひ其よても御心小足  
ハズ所思<sup>テ</sup>潮中潮上<sup>マ</sup>て物為させ給へりけむが  
其限<sup>テ</sup>齊た<sup>ル</sup>事を復興<sup>シ</sup>給へる義あり上小ハ次  
子ハ又<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>子御心を含させ給へる傳あるを見べ  
古事記小ハ伊豆能賣神の御名を擧て次於水底云  
こ有ハ委<sup>シ</sup>り<sup>ル</sup>○海底公古事記小於水底と所見  
又神功皇后御紀あり御名衆の所よる於日向國橋小  
門之水底所底而水葉雅之出居神と有り水底と云事  
知べ<sup>シ</sup>万葉七<sup>三</sup>十<sup>丁</sup>大海之水底照之と詠るを以て  
海子も水底と云不例あるを知べ<sup>シ</sup>同ト所子海底沈

○日本書紀傳十

○三百八十二

内一二六八三號



今と見え海宮修行事  
男三書に以海宮  
敷著火と見え尊而  
沈之之時海底自有  
可憐河云云有ハ  
更なり又化菜天皇  
十五年御紀に合探赤  
石海底海深不能至  
底

高天原者云

細繩

其並びに水底沈白玉云と有るを以知べし海底ハ万  
其外ハ海底を水底と詠る歌此彼有り  
葉五十三子和多能曾許意都布可延乃七  
之底奥已具舟乎又三十海之底奥津白玉十二  
海之底奥者恐と有る依て和多能曾許と訓べし諸此  
の海底ハ沈濯と云ひ又水底と云れば古事記に擲ハ  
玉神化鴉入海底乍出底之波迹と有る類して実ハ  
水を泳りて下ある所を云ふあり所以に古事記ハ水  
底中水上と並べ此ハ海底潮中潮上と對へて神名  
ありも然り此ハ經みて直に上下の義あり上ある上  
云る土地の高低に就て云ふ上下を如美斯母あると  
ハ等しき古事記に地下者於底津石根燒凝而云

八十二三十四海之  
底奥者恐  
回従水手運位  
為

云と云ひ大殿祭詞に此乃敷坐大宮地底津磐根乃極  
美下津網根云云高天原波青雲乃靄久極美云云と  
云類不又同トく海底と云ても緯ふる者有り右子引  
ろ万葉ふるハ更なり猶一丁三子海底奥津白浪立田  
山四四丁十一丁十四海底奥平深目千六十五小海底  
奥津伊久利二七丁八丁小海底奥玉藻之と有ふとの底  
ハ六五丁西海道節度使を送る歌ハ山乃曾伎野之衣  
寸見世常と詠る衣寸と目トくト遠き極を云て  
其即沖ふり然れば此底ハ放處の義あり可き事記傳  
三丁十小云れば見るを見て知べし右の如く發語之成  
て海底より奥と統ける緯ふる子對へるハ万葉一十二



△又海之底見  
津白玉

△志豆美曾久  
訓ハ傍ニ加伎都  
訓ハモ古ウ  
其ト運證ト  
云ハ然ラズ  
八洲元章  
字ハ義ト水  
神功皇  
元皇  
天  
皇  
御  
記  
云ハ然ラズ  
其ト運證ト  
云ハ然ラズ  
八洲元章  
字ハ義ト水  
神功皇  
元皇  
天  
皇  
御  
記

六丁 對馬乃渡渡中尔 四丁 海中尔 鹿子曾鳴成ふ  
ト是ふれハ其一ハ渡邊ト云テハ叶ウ可ウヲ然ル  
ハ此緯あるハ遠近の義あるハ底中邊ト對ひて其底  
即沖ふれハ右子引る共ハ此の例ハ非ず唯七一丁  
子海底沈白玉風吹而海者雖荒不取者不止ト有る二  
丁此ふら経子相同ト 其次子底清沈有玉半欲見十遍  
子ハ大海之水底照之云々ト同ト類の歌多在を見  
ても著クヲ思ひ此海底子上下の義ありト遠近の遠  
の意有るを思ひ分たれハ右の万葉の歌ハ依  
て海底ハ海沖ふリト思惑ふ事ト有むトての心遣  
あり冠辞考ハ右の五卷あり引て集中子海底ト  
云々ハ多クハ唯此歌ハ冠辞ありけりト云レリ  
説ハ底子右の如く経緯の有て共ト ○沈濯の沈ハ下  
其意味の異る事を知れざるあり

留<sup>ル</sup>て鎮<sup>チ</sup>字を志豆年と訓ら子同ト又沈の自然あり  
方を志豆久と云ハ下着<sup>シツク</sup>の意あり其義子於て異る  
る者あり其ハ古事記子故其猿田毘古神坐阿邪訶時  
為漁而於此羅夫具其手見咋合而沈溺海鹽故其沈居  
底之時名謂底度久御魂ト有る其ハ此の沈濯の如く  
自為給ふ子ハ非て他<sup>物</sup>沈<sup>ル</sup>ル給ふ故ト沈溺ト云  
るハ其底子沈居給ふ間<sup>の御名</sup>を底度久御魂ト申せらハ記  
傳子説レタルカ如ク底着御魂の義あるハ沈を志豆  
久ト云々下着<sup>シツク</sup>子同ト子を思ふ可ク滴瀝を志豆久  
ト訓も又同言あり  
万葉十九子藤奈美能影成毎之底  
清美之都久石半毛珠著曾吾見流



又万葉二十子美玉  
白玉、有ハ水沈子  
淡も着も同一義也

こ見え又上引る七子海底沈白玉又水底午沈白玉  
ふと有る沈志豆久と訓る宜し其並ひ子底清沈有  
玉乎と有ハ右の十九あり同ト訓ありうと思ふ小  
然らず此沈有ハ志豆米流と訓へき所あり東神天皇  
六十年御紀子玉葦鎮石出雲人祭と有る鎮石を志豆  
加斯と訓るハ志豆伎を延九る言の由玉勝間 卷  
子云れ九る志豆 沈の義を下留ありと云ハ上より下  
伎也又此例あり 沈の義を下留ありと云ハ上より下  
日行至るを云ふ言小天孫降臨 章子沈之干海と有  
を其第一一書子投之干海と見えたり此を以て此の  
沈濯も第十一書ふ多入水吹生磐土命ふと見えたり  
類と知べし万葉二三四下沈之妹之光儀乎と有る水  
子入九るを云ふあり名義枚子沈字子都久とも登栞年  
と云訓有を以て志豆久ハ下着志豆年ハ下留の義

今云中津女童命  
次甲筒男命云々  
表筒津女童命  
次表筒男命云々

ふる事愈以て明りあり者あり 次も云如く如豆  
子對ハ思ハ疑ふ所無り可し偕其豆年ハ祝詞子神  
道坐と有を統紀宣命ハ神技坐と書るを以考ふ可  
き者 ○號曰底津女童命次底筒男命古事記ハ底津  
綿津見神次底筒之男命之次、皆然り然るハ其統の  
混れむ事を恐れて一ハ神と書き一ハ命と書別  
るハ此者あり此心遣ひ甚宜し 先ハ綿津見神ハ  
筒之男命ハ其海の事を所知せし神子坐せハ自然  
子大物主神と事代主神との如く物と事とに分り  
て其物を知るハ主たり事を掌るハ令あり斯る所由  
子依て綿津見神筒之男命と記一分て彼記ハ伊邪那  
岐神伊邪那美神を天神の御命を蒙坐る後ハ伊邪  
那岐命伊邪那美命と申す例ありむ思ひハ伊邪  
此ハ其子てハ有ハ有るべし唯其混雜さう令心用  
ふりと見ゆ右の神等の名義ハ下子至て説を待べし

○日本書紀傳十

○三百八十五



○底筒男命第十一書ハ出水吹生大直日神又入吹  
生底土命と有る是より名義下 小説ハ其子盤  
土命赤土命と有る土ハ筒と同トトテ別意有  
ハ非ズ 此ハ就て又思 鹽シホ 筒ツツ 先翁ノ 天孫降臨章海宮天孫降臨章海宮 旌行章子  
ハ此三神を合せたり 御名あり 少童命三神を合  
せて大綿津見命と申す 聞えたるを考合す可し 其  
ハ此下 ○潮中ハ古事記ハ唯於中と有り即水中の  
義あり 諸上ハ海底と有ハ底津又童命と云神名も  
合ひ九レハ其子對へてハ此ハ海中と云べく次あり  
潮上ハ海上と云て其成坐了神の出自も著くて甚宜  
し 其のろを其海中ハ水中を云と渡の中を云と此

も又経緯共ハ同言ハて紛ハハキ故ハ潮中と云る  
子ころ有ハ海中と云て苦ハハキ所あり事其  
成坐了神を中津又童命と申すを以知ハハ海宮旌行  
章第六一書ハ推放海中則自然沈去第七一書ハ天孫  
之胤豈可産於海中第八一書ハ入海之時海中自有  
可於小河て見え古事記ハ海神の御言ハ今天津日  
高之御子虚空津日高為持出岸上國云ハ若渡海中時  
無令惶畏と有ハハ水中を海中と云るハ是其経  
あり者あり 其緯ハ方ハ神武天皇御紀ハ仍引軍漸  
四年御紀ハ茅渚海中有梵音云ハ又上引万葉一  
ハ對馬乃渡ハ中ハ四ハ海中ハ鹿子曾鳴成と有ハハ

○日本書紀傳十  
○三百八十六



仁徳天皇十  
 年御紀に云く  
 能く於水中云  
 沈没而不可  
 則其知真神觀  
 水中亦有水面  
 を云く非ず水底  
 に至る所を謂  
 水中あり

ハ廣く海面の事を海中と云るも水中を云ふハ異  
 あり諸古事記に於中と有る其傳に此ハ水底水上  
 對ハルハ必水中と有るべき故に延徒が水字を加へた  
 る所ハ然る事不し諸本も水字無き日就て猶思ふ  
 思ふハ水底水上と云ハ皆古言なり水の中と云ハ凡  
 て水内を廣く云言ひ故に唯中と耳云るも有ら底と  
 然云る例ハ非り故に唯中と耳云るも有ら底と  
 上と云水云へハ中ハ自其中間に聞ゆと有り然  
 得置べしハ○潜濯ハ水中に入て水を被り濯ぐあり  
 古事記にハ於中瀬隨迦豆伎而滌時云くと有て其ハ  
 想てハ係れろを此ハ海底に沈と云い潮上ハ浮  
 と云て潜を此潮中にての事と爲り神功皇后御紀歌  
 珥倍延利能み豆岐齊奈又齊多能和多利珥伽豆區  
 苦利と有て其ハ沈瀨田濟と探其屍と並用九は又九茶  
 思

天皇十四年御紀に赤石海底真珠云々更集處之白  
 水即以令探赤石海底云々又入探之と有て水鳥の水  
 波るも海海底に入み迦豆久と云事常あり  
 名義抄に潜字に種々の訓有け中ハ迦久流又久具流  
 又迦夫志とも有る迦夫志ハ上伏して天孫降臨章竟  
 一書に頗頃と一有る字の意にて水中に潜入る状是  
 あり然れば迦豆伎ハ上着きて水を顔に着て其中に  
 入る意ふ事灼然古事記明言大御歌に加夫都久  
 麻肥途波阿氏受と有る加夫都久ハ上着ふり沈を志  
 豆久と云ハ下着ふり對へ思はる其意知るはむ者



ありたり一被衣を迦豆伎と訓之被物を迦豆祁母能  
と云ひ名義枚子被を加字年理とも迦豆久とも訓之  
ふと彼此思合せて曉る可あり冠辭考より万葉十四子  
亦保梓里能可立思加  
和世半と有ハ鷗鷲の潜と云を略きて云係九り神功  
皇后御紀歌子珥倍迺能ハ豆岐齊奉又万葉四子二  
宝鳥乃潜池水不詠り迦豆伎ハ并ハを額突と云如  
く水子頭を衝入る意の語ありと有り諸万葉子猶  
見ゆ三子潜為鶯與高部共七子我潜来之奥津白玉又  
潜者莫為浪虽不立又君無ハ潜為八方又石浦迴潜為  
鴨又千遍告潜為海子又潜為海子虽告十二子海處女潜  
取云志貝十六子大船尔小舩引副可立久登毛十八子  
於伎部之麻伊申伎知多里豆可立具知布十九子奈兵  
乃海部之潜取云真珠乃見我保之御面ふと見えたり  
和名枚子本朝式云伊勢国等 ○中津女童命諸本共子  
潜女知名加豆岐米と有り  
表中津女童命と有る表字ハ行くと此子用無ハハ削

去つ抑皇大御書子存る字ハ一字と雖も私に改ふと  
為む事ハ甚に可畏き事ハ有れども此より彼を攻  
の彼より此を攻る時ハ真正と託とハ真清明子知る  
るを猶此ハ海底子底津女童命潮上子表津女童命  
と有る上ハ此潮中子潜濯かせ給ふハ中津女童命  
子坐す事疑無ハバ決て後人の誤寫多事灼然けれ  
ハ今此を改るハ何の憚る事ハ有む類史の今本共  
も表中津女  
童命と有ハ却りて神代紀より校して然る誤を傳へ  
たりし者多可ハ舊事紀ハ此書を取れ多あるハ其  
子ハ表字無ハ當時然る ○中筒男命第十一書子又入  
善本の有けりハこころ ○吹生赤土命と有ハ同神子坐事記傳定ウレカ  
説の如ハ備同



書六 五十五丁 子凡て物の中間を中と云ハ本此中瀬より  
出乃言よて清明<sup>パカ</sup>と云事多む阿と那と通云ハ  
常あり即此段の神名の赤土命ハ中筒之男命子坐  
又其御袂<sup>ハ</sup>給ひて清明く成給ふ瀬ふルバありと云  
て中と赤とを一意小見ルルなり故思ふ子此より以  
前子天御中主尊と申す御名有り傳四 八丁 子説了  
如く天地の未生ざり一時より高天原謂ゆる天中子  
其神の<sup>ハ</sup>坐て萬子御祖神小渡るせ給ひて其御齋  
<sup>ハ</sup>坐す限ハ即此世の極多るが其即天中ありあり備  
其中ハ名處<sup>ナカ</sup>よて萬物の成て名有る域の謂ある事云

も更ふルハ此中子ハ相對ふ物無きあり若て此天中  
ハ天日の御照<sup>ハ</sup>坐す世の限子<sup>ハ</sup>有ルハ自然子清  
明子意も有る故子通ハ<sup>ハ</sup>云りけむ<sup>ハ</sup>中筒男命  
を赤土命と見申す事ハ有けらある可<sup>ハ</sup>知禮を阿禮  
あど云か如き状子言の通へる者ありけり然ルハ物  
中と云て清明子通へるも然行べき道ありを以あり  
先上中下と云ひ初中後と云ひ表中底と云ひ如き其上  
子ても下子ても初子ても後子ても表子ても底子て  
も皆偏ル所よて其正しき位を得ざるを其中心  
も上下子通り初後子亘り表底を兼る所ふルハ自然  
子清明子義を含まず<sup>ハ</sup>非<sup>ハ</sup>ズ<sup>ハ</sup>此を以て右の  
説を諾へるあり上ある中瀬又記傳六 九丁 子伊豆能  
の傳子委<sup>ハ</sup>く云るを見べ<sup>ハ</sup>又記傳六 九丁 子伊豆能  
賣神ハ御袂子依て穢悪き麻賀を神直毘大直思子直



一清めて直く清く明く成れる御璽あり伊豆ハ即阿  
伎豆ふる事右ハ云るが如し今世の言も何もても  
善々々ぬ事の盡終るを明と云ハ此義ヲ叶へりと云  
ハ又古ハハ萬の吉善き事を凡て明一とも清一とも  
直一とも云り云ことも有り然ルハ上も註せら如  
く祓除を中瀬ハ物為給へるを始として大祓詞ハ大  
中臣云こと云ひ又天津金木天津管曾あども本末を  
除て中間を用ふる由有るを皆其中間を明るき所と  
して用る義あるを思合せて曉る可一然ルハ中ハ名  
て明處の意有る事知バ一上ある中瀬の所註せら  
が如く上下又ハ左右不ども對へ云ハ平處の意又

△延體天皇六十御紀  
子天住志神初以海  
長至銀之國云云授  
記於中營田天皇云  
海國初置官家  
為海長之蓋屏と  
見又欽明

自然ハ備ハ○潮上を古事記ハ水上と有り此も例  
ル者アリ○潮上を古事記ハ水上と有り此も例  
小依ハ海表不と書る可き所不れども△**敏達**天皇二  
十三年御紀ハ夫海表諸蕃自胎中天皇置内官家と有  
を叙秘訓ハ和多能保加と訓せて崇神天皇七年御紀  
ハ海外之國と有ると同ト意以て記されハ其字ハ  
此子てハ和多能字閉とハ訓難けハ海上の字を祓  
へき所不れども其ハ神代章第五一書又宝劔出現章  
第六一書不どもて宇那波羅と訓べき所あり故ハ  
彼此指支ゆる故ハ潮上の書ハ者あり古事記の  
見神の所ハ訓上云字閉と見えハ潮上も水  
上ハて見海上も字閉と訓て如美とハ云ハク

○日本書紀傳十

○三百九十



令神武天皇御紀  
魚無大小悉野  
營獨被業二浮流  
又者云一頃魚皆出

ず其ハ表津女童  
神の下子云ハ上然ルハ此ハ外ハ潮中潮上  
ニ字遣ひハ所見ガリケル又古事記水上ト有ハ万葉  
十九四丁子水上波地往如久船上波床座如ト所見テ  
此ハ海上を云リ十一丁ハ水上如數書ト有ハ川歌ト  
海歌との間ニ在ルハ何ル子也就ハ二十丁子奈波  
所見九ルとも其を例子引テ此の海上を然訓ハ難  
四子浪上半五十行左具久美ハ子波上從所見児嶋之  
ふト有ル如キハ又其潮よりハ浪子用有テ云ルハ  
又此の例子ハ取難ト如何ト為テも潮上ト云事見當  
り難ク○浮濯ハ古事記序子浮沈海水神祇呈於滌身  
ふト有ル是ガ例ハ宝劔出現章第六一書子有一箇少  
男云ク隨潮水以浮到ト見え仁徳天皇十一年御紀子

沈是匏而不谷逆則ふとの浮（字加長）字加倍ト訓ナ  
を以テ此も字加倍濯岐ト訓ベキガ本子浮を字倍  
と訓ナレトモ右の沈を志豆美潜を迦豆伎と訓ラ  
合せてハ言の足ハガ心為ラガ故ガ万葉一二十  
子玉藻成浮倍流禮ト有ル猶多在リ（瑞珠盟の章第  
二一書子以ハ  
坂瓊之曲玉浮寄於天真名并云ク以所持劔浮寄於天  
真名并ト有ル浮不トハ物を水子令浮ラガ故子字  
和ト訓ベハ自浮ト物を○表津少童命古事記ハ上  
津綿津見神ト有リ記傳六六丁子注子訓上云字閑ト  
有ル是ハ訶美ト訓ナトキカ為の注ガ字波都ト訓  
ベハ字閑ハ上某ト續ク言有ル時ハ凡テ字波ト云例







△ハ上三百十三丁ヲ云  
リ考合テ可然ルハ

底津石根と下津磐根と常子相通ハ一云ふと考ふ可  
一然ルハ宇閑ハ浮方ウキハにて上ノ意斯多ハ沈シム方カタにて  
下ノ意ふ多可く又曾許ハ下處シツコふ事上三百八十  
註三カ如クあり 此を以て緯ヰノ加美斯母イハ大子異  
宇閑と註三カルル事コトヲ知ベト此コト古事記ノ  
ハ心有ル事コトヲ見ベト一ノ表筒男命第十、一書子ハ子時  
ハ水吹ミヅフキ生ナ磐石土命イハと最初ハ出デたり磐石イハ石イハノ伊波イハの  
義イハ非ズハ宇波ウハの轉マルルあり宇ウを伊イと訛シ来キル例ハ  
景行天皇十八年御紀ノ到キ的テ邑ノ而進食是日膳夫等遺  
蓋故時人號其忌蓋處曰浮羽今謂ハク的者訛也ト有ル類  
ありと知ベト其外ハ魚ウヲを伊表イハと云フハ芋ウを宇母ウモと

も伊母イモとも通ハ一云フカ如ク神名式ノ土佐國長岡  
郡石土神社ト有ル其國式ノ社考ト云フ物ノ在リ池村池端  
称ヘ住吉神ト云フハ然ルも有ル一ノ記傳ノ五ノ大事忍男神  
昆古神石巢比賣神此二柱ヲ上筒ノ之男神ノ當ル故ハ  
宇波ウハと伊波イハと通スハ豆都マツと都知ツチと通スハノあり書紀ノ  
蓋ニ工ノ老翁ヲを蓋筒ノ老翁トも有ル業ノ都ノと近シと云  
んたり次ニふル三柱ノ筒男命ノ傳ノ又第十、一書磐石土命  
の傳ノハ○凡九神ノ其ノ九ヲ十ト讀ムたるハ今本ノの如ク  
云フハ八十柱津日神ヲ一柱ト為ス時ハ然ルふれども白日神  
社本ニ八十柱津日神次大柱津日神ト二柱ヲ並載ス  
此ノ凡ノ古事記ノも合テ甚愛スたり其ヲ二神ト有ル  
上ノ凡ノ十神矣ト無クハ叶ハざる事アリ然リと雖



も然計り改めむ事甚容易きに似たり姑く其任に  
置て訓八十神と訓て猶善本に出む事を待つ者なり  
○其底筒男命 中筒男命 表筒男命 八底より中中より  
上と次第に成坐る故に此ハ右の如くあるを神功皇  
后御紀に於日向國橘小門之水底所底而水葉雅之  
出居神名表筒男中筒男底筒男神之有也と有て其次  
子ニ所出たりも然るハ其成出坐る後上中底と云  
ふ次第有を以るり如此く其生坐し次第と其所在と  
に依て如此く記し分るれ九多ハ神の所論に然有し  
故あり可し 古事記ハ其所に底筒男中筒男上筒男  
三柱大神者也と有るハ此は成坐りし次

第を以舉るれをた者なり御紀 右の橘小門之水底所  
底而ハ此時に被除し給ひし所其即此神の所在あり  
事を兼たり文あり其所底ハ釋秘訓に出せざる其任  
吉大神の下に此字を引るるハ所居と有り又古本に  
も字ハ底不が假字ハ韋氏と有り此を伴業諾尊  
の此被除の時沈瀧於海底と有る事と見れば所底  
ハ伊多理氏と訓べし又其被除に成出給ひし任に其  
三神の水底に御在し坐し由あるハ釋記に引る所居  
と有る本の方を取べし右の垂子五十鈴宮所居神と  
も吾田節之淡郡所居之有せとも有ればあり虽然右



の所底の方や勝りたるも名義故に底字に登杯年  
又伊多流と云訓も見え且所底までハ伊弉諾大神の  
御事より係りて事も廣げれハあり 右の紙子引る所  
居ても有も亦一本  
ふ可一通證に祐之日底當作居と有れども其ハ此  
に深く考入たる説有て云りとも思しうぐされハ從  
ハ難水葉稚之出居神ハ其三神の成坐りし時の状を  
云あり水葉ハ傳九 三十 ハ下子云る如く罔象此云美都波  
と云ハ水生の義よて天地の間ハ水と云物の生れ  
意の神名多々分此も其と同トく彼沈濯ぎ潜濯ぎ浮  
濯ぎせ給三涌出るが如く水の激りたるを云あり古  
事記ハ自浪穗兼天之蘿摩船而云々天孫降臨章第六

此ハ御櫻の時  
然水葉稚やふ  
出る中より生  
り云事ハ此  
海底潮中潮上  
澄か給事  
先て因以生神  
有と事ハ宣へ  
者

一書ハ其於秀起浪穗之上起ハ尋殿而ト有ハ浪穗又  
神武天皇御紀ハ浪速國を浪華と云ふども浪ハ華ト  
云語の有ハ依て訛れ者ふれハ水葉ト云事も何  
ら無らざるも稚之と云ハ水葉の散りてハ出ハ為  
を以云ふ 如紙ハ私記日師說水葉甚翠稚也言此神  
浸り漬る木葉を以て譬ハ此ハ非ず此ハ御櫻の時  
の消息を宣へるあり此を水沫の義と思へる説ふ  
今辨ふるも是す 古事記ハ此の御名告を是天照  
太神之御心者亦底筒男中筒男上筒男三柱大神者也  
と有る其下ハ此時其三柱大神之御名者顯也と注せ  
る此ハ就て又心得べき事有あり其ハ神代の古傳ハ



其三神の成出坐り古傳ハ有る其三神ハ何れ  
の事を主給ニと云事も何れも知るれざりしを此時小  
至て其行事の頭ハハ給へるを云ふり名の義ハ傳三  
八十四十八丁五小云り此ハ外にも例有る事にて風  
神の即事ありも神代の古傳  
丁ハ有るふり天下の公民の作りと作る物を悪し  
風荒き水と逢ハセザ熱成シ給ニ神は坐て申す事ハ  
崇神天皇の大御世に至て詢し申させ給ひ故ニ天  
御孫今國御孫命と申す御名の頭れさせ給へる不同  
トトキ者宿筭男と申奉る義ハ一也記傳六七十ト筭ハ  
宿字にて上の都ハ底津中津上津と上へ属き下の都  
ハ之男へ属く言ふり此有る如ハ此筭字元より意  
無きふり都ハ第十一書ハ此神等を底土命赤土命

磐土命と有れば都知と通ひて山雷神野槌神の都知  
も亦此都ト同ト又古事記に在る石土昆古神石巢  
毘賣神も此表筭男命に當る由記傳に辨有れば都ト  
と都知と巢との三義有る故此三神共ト何れも女  
童神の底中子上各其生坐るに續て成出給へれ  
バ又其に就て考ふ可き事有べく然其に就て説ハ立  
べくふし有ける宿彼女童神ハ一也海神と坐せば其  
主宰に坐す事海宮遊行章の趣ト明らるる然ら  
る海上の事と就ての御事跡の多く此神等ト係れ  
るハ如何と云ふ女童命と此神等トハ體ヒトと用ヒトとの差

○日本書紀傳十  
○三百六



別此子在る事あり大國主神と事代主神との差別子  
 異あらず君臣の義は非れども又皇命ハ皇御孫尊  
 の如く此神等ハ即前の事執持て政ごつ人の如く然  
 り其の海中を所知者す神二神有る如く聞えて何れ  
 其都ハ都知ハ実ハ賀茂翁説の如く都持の意子て其  
 海神の所知者す大海を特別て統スる謂あり可し然れ  
 ハ底筒ハ底津持中筒ハ中津持表筒ハ表津持まて之  
 男と統くハ建御雷之男神あとの如く又表筒と石土  
 と石土と石巢と相通へる例を以思ふ其都知共子  
 統るの義を合の事申すも更あり斯れハ底筒ハ底

統中筒ハ中統表筒ハ表統の義あり者あり然れハ大  
 海を特別て統る神子坐る故ハ萬の物事共ハ海神子  
 先立て物為給ふ謂あり万葉五三丁十子此神等の事を  
 宇奈原能邊尔母奧尔母神豆麻利宇志播吉伊麻須諸  
 能大御神等と詠る子ても其海中を持分て統給ふ意  
 亦ハ所見たりけり都と須と通ふ例ハ出雲風土記ハ  
 の珠洲郡を都と云る子り又次を都岐と有ハ能登國  
 申す神名の都ハ例の津あり知ハ幸りて海宮遊行章  
 小兄自有海幸身自山幸有書ハ兄能海幸故神海幸  
 得海幸身能得山幸身自山幸身自山幸身自山幸身自  
 彦弟能得山幸故張山幸身自山幸身自山幸身自山幸  
 云て此幸即各其稟賦て天神より賜り得る徳と云  
 者あり備其佐知の佐ハ狭衣狭道ふとの狭の類とて

○日本書紀傳十

○三百九十七



知と云ふは幸の言本と聞えられハ底筒ハ底津幸中  
筒ハ中津幸表筒ハ上津幸の義ふらむとも思出  
ハ人の異し事を見且 借海神ハ此子底津女童命  
悲れて此考ハ置れ多あり 中津女童命表津女童命と三柱成出給へハ海宮遊  
行章子至てハ豊玉彦命と一神と見えたりハ御身を  
合せたり者ふ可し此三神も其例も一柱に混り  
り給へる事も有やと此を探索るハ天孫降臨章第  
一書ハ其事勝國勝神者伊弉諾尊之子也亦名塩土老  
翁と所見たり是より海宮遊行章ハ鹽筒老翁とも  
有て筒と土と相通へる事右ハ註るが如く又塩と云  
ハ潮の事にて海の底と中と表とも惣て云ふり其ハ

其成出坐十所を海底又ハ潮中潮上と有て知る  
又此を伊弉諾尊之子也とハ有れども如何なる申す  
縁化りても無きハ古くより別神と傳ハれりハ有  
りとも思合す可き事ふ有けり其ハ古事記 海宮  
於是其弟泣患居海邊之時鹽椎神來問曰云、我為汝  
命作善議即造无間勝間之小舩載其舩以教曰我押流  
其舩者差暫往將有味御路乃乘其道往者如魚鱗所造  
之宮室其綿津見神之宮者也到其神御門者云、其海  
神之女見相議者也云と有て此時の始終の事を具  
子始より知給ふ神ハ誰ら有む其海神と力を合せ給



通證引る天野信景  
 和泉国大鳥郡  
 開日打真住吉神社格  
 社三村大明神所坐塩  
 土老翁也神功皇后在  
 時奉遷寺之故帰  
 国之後鎮坐此處為  
 住吉之外多是以撰所  
 住吉造曆時此社亦更  
 造宮蓋一體別祠之  
 義也と有り云々然  
 る言あり

七<sup>行</sup>給へる此三神坐すてハ似着ハ一りりさるを思  
 不可一此時の事ハ海神三柱も一神みて大綿津見神  
 とハ豊玉彦命とも申せハ其子對へる所ハ此の三神も底中表を兼て  
 塩土老翁ふどハ申す可き事あるを猶海宮遊行章  
 事あり今ハ其目易き方ヲ就て古事記を引出た  
 る者あり其ハ事勝國勝長狹神の傳子委しく云てむ  
 ○住吉大神ハ神名式ハ撰津國住吉郡住吉坐神社四  
 座並名神大月と出たり是あり古事記ハ其底箇之  
 次相嘗新嘗  
 男命中箇之男命上箇之男命三柱神者墨江之三前大  
 神也と有り釋述義ヲ引る私記ハ先師説云稱四座者  
 神功皇后坐別殿歟と見ゆ此ハて四座の本説明り不

り此を以て見ると記紀の御撰有し和銅靈龜よりハ  
 後延喜より以前ハ四座とハ成れり者あり可し然る  
 を二十二社註式ハ社家説云住吉社四座第一天照太  
 神第二宇佐明神第三底箇男中箇男第四神功皇后也  
 と有ハ御紀の趣とも違ひて異しき事あり然れども  
 住吉と地名の起れりも其神社の定れりも此三神子  
 起れり事ありハ此三前大神ふむ住吉大神ハ坐す  
 けハ斯レハ社家説ハ妄説なり云々然ハ非り可し古  
 事記ハ此三神の御名兼坐す所も天照太神之御心  
 者と宣ひて皇太神の大御命を受賜ハる趣あり



八由縁無ニ非ズ次ニ宇佐明神ハ八幡三所の中ニ有ル  
此賣神ニ一テ即宗像大神ハ三代実録貞觀十二  
年宗像大神告文ニ我皇大神波掛毛畏岐大帶日姫乃  
彼新羅人平降伏賜時不相共不加力倍賜天我朝平救賜  
比宗賜奈ハ所見九ル也御紀ニ託漏ハル也ハ  
住吉大神ト共ニ當昔被祭けハも知べくす斯ルハ  
四座共ニ古よりの事ニ有ルを此ニ即是住吉大神ニ與ト  
有ル其主ト坐す神ト云ひ殊更ニ此ニ用有ケ故ニ如  
此有ルもて譬へハ古事記ニ大山咋神を坐近於海國  
之日枝山亦坐葛野之松尾ト有ル也も日吉の大宮ハ

大己貴神ト一テ主ナル也大山咋神ハ二宮ニ鎮坐一松  
尾也左ニ宗像大神坐て主ナル也大山咋神ハ右ニ坐て  
却て相殿神の如く有リ如此ニ古書ハ其所用無  
き事ハ態と略けるも常多ルハ然耳泥也可ニ非ズ且  
同ト住吉神トも長門多るも筑前多るも三神を一社  
子祀へるを同御世ニ出来ル此神社の棟を別ニ一テ  
現ニ四社有ルハ其祭神社説の如く有ル故由ニ依ル  
事ニ有ル也と所思也此ハ社説を助け過せる也如  
社不トハ御紀の趣ニても式文の趣ニても大物主神  
一座有るを注進次第ニ依リ大己貴命ヲ彦名命を合  
せて三神を祀ル也が如く此例猶有ベき不リ諸右の  
宇佐明神の宗像大神ニ坐事ハ瑞珠盟約章第三一書

二神社考引る注式ニ  
ハ宇佐明神神宮務  
堀宇ト有リ猶

日本書紀傳十

四百



の傳云べし諸享祿の頃記せし八幡憑童託と云物  
の神功皇后神託に任せ針を海に入北三尺の鮎食付  
て上り又御髪を河に浸せし水龍神二人の童女參  
て御髪を二分し龍神女ハ巖嶋大明神水神女ハ  
宗像大明神と頸に給ひけり云々有る巖嶋と宗像  
を別神とし龍神水神の事云々御事ハ漏れりけり  
御紀にも古事記にも宗像大神の御事ハ漏れり可  
の三代実録と此文に無くハ何を以てハ知し甚と可  
美子賜物あり然れハ彼御紀に皇后針為鈎取粒為  
鈎取取裳糸為縵登河中石上而投鈎祈之曰朕西方欲  
求財國若成事者河魚飲鈎因以禁竿乃獲細鱗魚云々  
既而皇后則識神教有驗と見え又皇后還詣撞日浦解  
髮臨海日云々今頸濮海水若有驗者髮自分為一西即  
入海洗之髮自分也と有る此二事あはれ何れ神  
祈り給へりとも知れり此書に依て明  
並名神大月次新嘗と有ハ其時ふと祀給へりや此  
處警余の地にて神功皇后の推櫻宮の近邊ありとも  
思ふ可し然れハ住吉大神を祭るに就て其祀給へり可  
御世に住吉大神を祭るに就て其祀給へり可

く思えて如此く餘事を記傳六十七に此大神  
甚く長説言為なりけり記傳六十七に此大神  
の鎮坐する事ハ書記息長帯比賣命西國より海路を歸  
上り給ふ所は忍熊王引軍更返此於住吉時皇后聞忍  
熊王起師待之軍武内宿禰懷皇子横出南海泊于紀伊  
水門于時皇后之船廻於海中以不能進更還勢古水門  
而卜之於是天照太神誨之曰云々亦表筒男中筒男底  
筒男三神誨之曰我和魂宜居大津滸中倉之長峽便因  
者往乘船於是隨神教以鎮坐焉則平得度海之見元又  
撰津國風土記に所以称住吉者昔息長足比皇天皇世  
住吉大神現出而巡行天下貢可住國時到於詔名標之



今注す引舊記  
任吉大神其荒魂在  
筑紫之小戸和魂者  
神皇即后征三韓之  
時親坐攝津而託神  
功皇在體而循行四  
方遂到攝津之地  
言言真任吉之地  
也因鎮坐其地言任  
吉皇神之任吉那所  
之任吉由攝津地而  
通呼之見此  
明りあり者

長岡之崎前者今神宮乃謂斯矣可任之國遂讚稱之云  
真任吉國乃是足神社今俗畧之直稱須美乃殿之有  
西の國ありをも同トく任吉と云ハ此の名を取ル  
るあり和名抄攝津國任須美三郎と有り任吉を須美與  
後世の事にて那良の頃迄ハ須美能延と耳云り先此  
記ハ墨江と書き書紀五葉ヨハ任吉と書こも須美  
能延と訓こ又万葉ヨ墨之江清江須美乃延と所見ハ  
ふど有て須美與志と云る事ハ一也也  
△其地和魂記云墨江之云前未神也此荒魂者常於是從軍  
△神中抄九ノ事記云墨江之云前未神也此荒魂者常於是從軍  
在筑紫小戸和魂今在攝津墨江耳と見え又  
門山田邑也云こと有る其子對へて宣へるあり和  
魂ハ其本體ヲ屬て離ルざる者あり由己ノ註せら如

くふれハ此より後不任吉大神の本宮と申すハ此攝  
國あるを云事長門ニ在ル筑前ニ在ル其神社の名を  
任吉と申すを以知へ一漳中倉之長峽ハ記傳三十七  
丁子和名抄子菟原郡任吉郷有る其地にて今も任吉  
村と云い本任吉とて神社も有るあり古名漳中倉里と  
云いと不此地ハ武庫山の支別の南方へ長く引延ル  
る尾崎にて真子長峽と云つ可き地あり今海原へハ  
村より七八町有り云くと云れたり然れども風土記  
あり長岡之崎の下ナギ前者今神宮南邊是其地と注せ  
る神宮ハ今の任吉郡ありを云て本任吉の方を云り



此注式引舊記  
 任吉大神其荒魂在  
 預業之小戸和魂者  
 也因鎮其地也  
 吉豐津之任吉耶阿  
 之任吉由津津地之而  
 通呼之見此  
 明りある者

長岡之崎前者今神宮南邊是其地乃謂斯實可任之國遂讚稱之云  
 眞任吉國乃是足神社今俗畧之直稱須美乃殿と有り  
 西の國も亦多をも同トく任吉と云ハ此の名を取ル  
 りあり和名抄撰津國任須三郎と有り任吉を須美與  
 後世の事よて那良の頃迄ハ須美能延と耳云り先此  
 記ハ墨江と書き書紀万葉ヨハ任吉と書てハ須美  
 能延と訓ハ又万葉ヨ墨之江清江須美乃延と所見ハ  
 不ど有て須美與志と云事ハ一也也  
 其吾和魂と宣ハるハ本年十二月の下子於是從軍  
 神表筒男中筒男底筒男三神誨皇后曰我荒魂令祭況  
 門山田邑也云と有る其子對へて宣ハるありが和  
 魂ハ其本體ハ屬て離ルざる者あり由己ハ註せら如

くふれハ此より後不任吉大神の本宮と申すハ此撰  
 國あるを云事長門子在此筑前子在此其神社の名を  
 任吉と申すを以知へ一漳中倉之長峽ハ記傳三十七  
 丁子和名抄子菟原郡任吉郷有る其地よて今も任吉  
 村と云い本任吉とて神社も有あり古名漳中倉里と  
 云いと不此地ハ武庫山の支別の南方へ長く引延た  
 り尾崎よて眞子長峽と云つ可き地あり今海原ハ  
 村より七八町有り云と云ハ然れども風土記  
 あり長岡之崎の下子ナギ前者今神宮南邊是其地と注せ  
 り神宮ハ今の任吉郡ありを云て本任吉の方を云り



と云言難けれハ猶能く此を正して其御紀ヲ傳す可  
一又同書三十五丁<sup>二十</sup>子高津宮御世又定墨江之津  
と有<sup>二</sup>就て熟思<sup>思</sup>之<sup>一</sup>菟原郡より今地子大神を遷奉  
賜へり<sup>一</sup>此御時子有けい雄略天皇十四年御紀  
子泊於住吉津と有<sup>二</sup>今地子聞えられたる<sup>一</sup>其より先子  
遷り給へり<sup>一</sup>事ハ知れたり然遷奉給へり<sup>一</sup>必神  
の御諭有けい事ハ論<sup>一</sup>無<sup>一</sup>此時子其津を共子終<sup>一</sup>  
定の給へる<sup>一</sup>あり可<sup>一</sup>と所見えたり<sup>一</sup>  
諸其地理を今云  
子本住吉ハ西海  
道の往還の傍子立せ給へる<sup>一</sup>北ハ武庫山あり南ハ  
海濱へ七八町も有れども是<sup>一</sup>海中の埋りたる地  
と聞り然れハ右の風土記の註<sup>一</sup>其者往來船と宣給へ  
<sup>二</sup>就てハ猶考ずハ有へり<sup>一</sup>ず

是が古事記子此時其三柱大神之御名者顯也と所  
見たり如く大神の行事の御名と共子顯ハれたる始  
子ハ有けり其省ハ例の所知者事<sup>一</sup>を省と云ふて万  
葉一<sup>二十</sup>丁<sup>二十</sup>子食國卒賣之賜牟登都宮者高所知武等と  
賣之と所知とを並云ふ是あり守護字を麻母流と云  
目守<sup>目</sup>守<sup>目</sup>て物<sup>目</sup>の眼<sup>目</sup>を看<sup>目</sup>て候居る<sup>目</sup>と云て此の省往來  
船と有<sup>二</sup>ハ守往來と云ひ<sup>一</sup>か如<sup>一</sup>古事記ふる其三柱大  
神の御言子我之御魂坐于船上而云々と宣ひ其を神  
功皇后御紀子神有誨日和魂服王身而守壽命荒魂為  
先鋒而導師船と有<sup>二</sup>其を承て則搗荒魂為軍先鋒請



和魂為王船鎮之所見たり此より和魂神の着往来船  
と有と具請和魂為王船鎮と事ハ一ありを以て任吉  
大神の船路を守りせ御在し坐す其行事の較略をハ  
知べきあり万葉五三十一好去好来歌子宇奈原能邊尔  
母奥尔母神豆麻利宇志播吉伊麻須諸能大御神等船  
船尔道引麻志遠云々事より還日者又更大御神等船  
尔御手打掛互墨鏡平播倍多留期等久云々多大泊尔  
美船播將泊と見え六三十一子任吉乃荒人神船舶尔牛  
吐賜付賜將島之埼前依賜將磯乃埼前荒浪凡尔不令  
遇草管見身疾不有急令變賜根本國部尔と有る此

云あり又十九平入唐使  
子賜へ大御歌子座見  
都山跡乃國波水上波  
地柱如久船上波床坐  
如大神乃鎮在國曾  
云々詠や給へると  
以て念其御守の状  
灼然き

同卜詞遣ひ六十三贈入唐使歌子墨吉乃吾大  
御船舶乃倍尔宇之波枝座船騰毛尔御立座而佐之與  
良年磯乃埼許藝波兵年泊尔荒風浪尔安波世受  
平久率而可敵理麻世毛等能國家尔と詠り又二十三  
ハ子陳防人悲別之情歌子安里米具利和我久流麻泥  
尔多比良氣久於夜夜波伊麻佐祢都美奈久都麻波麻  
多世等須美乃延能安我須賣可未尔奴佐麻都利伊能  
里麻宇之豆奈尔波都尔船半宇氣須惠云々七有て  
船路を守給ふ事と壽命を守給ふ事を云うハ全く彼  
御記の古語を取て詠る者あり  
但船を守り神を船靈  
神と申すこと別あり



神名式子住吉郡性船玉神社と見えたり其神よりて  
其ハ陸の岐神を海よて然申せりふり此事第十一書  
泉守道者の下子云ハ其を天利神とも申して土  
佐日記に廿六日夜半許り船を出して榜采る子午向  
為る所有り揖取して幣奉り為る子幣の東へ散れハ  
揖取の申して奉る事ハ此幣の散る方子御船速に合  
榜采入と申して奉るを聞て或童の詠る綿津見の知  
夫利の神子午向為る幣の追風止す吹ふひと詠る  
此程子風の巨けれハ楫取甚く誇りて船小帆懸ふど  
祝ふと有り是船玉神の事なり次子五日住吉の邊  
を榜行く云こ如此云て眺望め来る間子不意く風吹  
て榜げどもこ如云後へ退き子退きて殆く打没  
つ可一揖取の云く住吉の明神ハ例の神なり云ハ  
諸幣を奉給へと云子隨ひて幣奉る云然ハ海  
ハ鏡の如く成ぬハ云子と有り是住吉神の事あり  
又是まで住吉神と船玉神の守給ふ状子少差別有る  
事ふらる遣唐使時奉幣詞子大唐使遣佐年為依  
見ろ可一遣唐使時奉幣詞子大唐使遣佐年為依  
船居無兵播磨國與船乘止為兵使者遣佐年所念行間

尔皇神命以兵船居波吾作止教悟給此教悟給此那我  
良船居作給波部禮悦已嘉志禮代乃幣帛云進奉止  
申と所見たり此船居と云ハ津泊の事子て此ハ古事  
記高津小定墨江之津と有る此や右子船居作給と云  
るありむを其津の定れり始ハ神命に依る事を記す  
ハ漏されたりふり右子引る万葉十九贈入唐使歌  
小住吉乃三津尔船能利直渡日入國尔所遣云と有  
が如く唐使ハ彼韓征の由来と右の船居を作給へり  
この事子依て其墨江之津より發遣つ定りありて  
知べ一又其發遣つ時ハ其住吉社子て神命ふとを



二統紀十宝龜元年  
八月庚寅朔辛卯使  
推崇額位五位下伊  
王受神教於住吉神  
と有る是なり

請聞く事ころ有けりし右歌並びて住吉尔伊都久祝  
之神言等行得毛東寺毛船波早家多と有を以知へし  
然れバ古ハ住吉大神の御命を請占ふ人有ける不  
り万葉二ハ大津皇子竊婚石川女即時津守連通占露  
其事皇子御作歌一首大船之津守之占尔将告登波益  
為尔知而我二人宿之ハ有を合せ考へて知べきなり  
津守連の事ハ舊事紀ハ此三神者津守連等齋祠住吉  
三前神也有り神名式住吉郡大海神社二座の下ハも  
元名津守安人神と有を一奉ハ住吉人神と有り斯れ  
バ其津守氏あり人ハ大神ハ仕奉る内ハ古事をも兼  
て物為ハあり可ハ猶此借住吉大神ハハ右の神功  
下ハ津守氏の事を云む  
皇后の御時ハ顯給ひて祐奉給へり故ハ右の如く唐  
戎の國主ハ皇大御使を下賜へり毎ハ幣帛を進ハせ  
給ふ御事ハハ唯ハ船路を守給ふ謂耳ハハ非る事

又右ハ所見たると如ハ此大神の事の物ハ見元たると  
ハ繼體天皇六年御紀ハ夫住吉神初以海表金銀之國  
高麗百濟新羅任那等授記胎中誓言天皇云ハ此ハて  
彼馭戎の御政も專此大神の領知給ひし御事を知へ  
し天武天皇御紀ハ朱鳥元年秋七月乙亥朔癸卯奉幣  
於居紀伊國國懸神飛鳥四社住吉大神持統天皇六年  
御紀ハ五月乙丑朔庚寅遣使者奉幣于西所伊勢大倭任  
吉紀伊大神告以新宮同十二月辛酉朔甲申遣大天等  
奉新羅調於五社伊勢住吉紀伊大倭名足ハと所見  
たり此ハ御紀より以前の事あり其重く祭ハせ給



へりし御事を見る可し統紀子天平九年夏四月乙巳遣使於伊勢神宮大神社筑紫  
住吉八幡二社及香椎宮奉幣以告新羅無禮之状と有  
ハ此北非筑前國筑前國ありて神名式子那珂郡住吉神  
社三座並名神大と有と八幡大菩薩宮崎宮名神大と  
有と二社と式外子香椎宮と三社を云る所不ふと  
思ふ神階の御事ハ統紀子延暦三年六月辛丑叙正三  
位住吉神勲三等と有ふ物子所見なり始ありけり  
然れども己子正三位を奉るハ給へりハ此時迄度  
授奉るハが漏なりハあり可ハ同年十二月丙申叙  
住吉神後二位と有り日本紀略子大同元年四月攝津  
國住吉大神奉授後一位以遣唐使祈也と所見たり其  
より幾程も無く正一位の極位ハ進め奉給ひけり

を御紀ハ被漏ハあり可ハ又紀略子弘仁三年六  
月辛卯是日神祇官言住吉香取鹿嶋三神ハ社隔二十  
箇年皆改作積習為常其弊不ハ今須除正殿外隨被修  
理永為恒例許之と有り漸ハ其弊を厭ハ給二事  
と成ハ淺ハ何とも云ハ堪ハ御事あり  
其頃より又朝廷ハ愈唐戎の醜風を擬ハ給ひて  
神ハ天津神隨ハ大御子ハ遠ハ給へり  
が故ハ天神御子の大御孫威も振ハ成以て行て終  
小ハ外國より蔑如し奉り来りて蒙古の乱より始ハ  
頃の騒ぎハ此大神の先鋒と為て韓國を降伏せ給



へり御勢ふるてハ表裡ふる事づゝ一儲臨時祭式  
撰津國住吉神社正殿二十年一度改造其新便用神稅  
即充正稅と有ハ右の弘仁の御定ふる者あり  
平城天皇の御時近ハ此國も朝政為させ給ひけり  
其儀式ハ未明ニ主上出御有テ南殿ニ御在り坐す群  
臣百寮各ハ座ニ據テ四方の許人左右無ク丹裡ハ  
集テ高机の上ニ愁文の箱と云物を置りたり  
怪シメの民百姓近も申文を捧げて此箱ヲ入れ史外記  
辨女納言不ト次芽ヲ取上テ讀申す群卿各此を評議  
問ハ天子眼前敷定を下さる愁ハ退テ可被問由を仰せ  
申文多くテ殊の外日高けれハ即其座ヲ供御を  
ハ其後舞樂御遊不ト程の大事ハ無りける云々  
を聞食テ御理有べき程の大事ハ無りける云々  
天皇より以來此儀廢れたり猶式ハ殊外ハ遊逸ハ  
て政を心ヲ入給ハず然れども猶式ハ殊外ハ遊逸ハ

位の藏人二人を指テ御倚子の旁ニ居テ愁を令聞り  
群議を令聞りて後成敗為させ給ふ是今の職事の始  
あり嵯峨の別業不トヘ常ニ御在り坐しけり故ニ御暇  
無クして自朝政ニ遇せ給ハさりけりト所見たり如  
き世中と替れりハ神祇官よりも時不媚倚りて  
然事奏し定めたるあり由無き寺ふとを建させ  
給へると何れハ重き何れハ輕き嘉永の末の頃より  
頻ニ西戎北狄又東夷の國々より皇太御國を慢奉と  
醜事の聞ゆら就ても中古より敬神の儲舊事紀ハ  
御心の薄き御事の悲しき就て云耳  
底筒男命 中筒男命 表筒男命 此三神者 津守連等齋祠  
住吉三前神也と有り 姓氏錄 撰津國神 小津守宿祢尾  
張宿祢同祖 火明命 八世孫 大御日足 居之後也と有り  
天孫本紀 子天火明命 五世孫 建筒草命 津守連祖と  
有ルハ其より支ルハ多ふる可ト記傳六七十子此記



小墨江之津と云ひ右より引る書紀の文は天津彦彦  
倉之長峽と有れば住吉の本より津まで津守は此津  
を守り由ふる可し西成郡は津守郷も有る其人の住  
り里ありむ万葉十一 十住吉乃津守綱引之云々  
と有り諸此氏の此神を持齋く由り神功皇后御紀に  
三神誕皇后曰荒魂令祭穴門山田也邑時穴門直踐立津  
守連之祖田裳見宿禰啓于皇后曰云々と有て荒魂を  
穴門に祠給ふ時踐立を其神主と爲給ふ由り所見た  
れば其後子知魂を津國小祠給ふ時彼田裳見を其  
神主と爲給ひしあり可し諸此人は在り子孫は在り

兼て津を守りしより津守連とハ負けむと所見た  
り大同類聚方小田面久須利撰津國田面浦津守連通  
主と有る此を神遺方遺は津守直と見え又類聚方小  
生守里藥撰津國田裳浦津守連等云々と有れば右の  
田裳見宿禰ハ田裳浦の地名を以て負る名あり此地  
物に見當らずと雖も住吉の近邊ありてハ有るべきあり  
右の津守連通主ハ上より引る万葉二に所見たり津守  
連通と有る人々非し若同人ありむ其田裳浦  
ハ正しく住吉の内に在り小號あり事次諸又姓氏  
津守大明命之後也と云も有り和名抄を見し西成  
郡も菟原郡も津守郷有れば何れより別れ住い



今坂南莊子  
津守と云有り是  
あり可

一、ふろ可一又和泉國津守連大明命男天香山命  
之後也と見え又網津守連同上と有り此を内山真龍  
説く網撰津國依羅地而謂依羅津守歟と有ハ然事  
みて其人の守る津ハ撰津國の依羅津とて人ハ和  
泉國に住へり難し○神名式子長門國豊浦郡住吉荒  
や今詳し知り難し  
御魂神社三座並名と有る其荒御魂ハ神功皇后御紀  
に荒魂爲先鋒而導師船と誨奉らせ給ひて大御船に  
擣奉らせ給へる神に坐り備其荒御魂の御軍の先鋒  
と成給ひて健ひ進ませ給ふ御勢と天壓神の日出る  
方より日没る方に向はせ給ひ背より日神の神威を負  
奉らせ給ひて影の隨ひ壓ひ踞むと勇進ませ給ひて降伏せ給給へる大御  
後威の天地小亮度ルリ一ハ新羅國主龍大惶ここ奉

りて御紀に叩頭之曰從今以後長與乾坤伏爲飼部其  
不乾船抱而春秋獻馬梳及馬鞭後不煩海遠以每年貢  
男女之調云こと有け如く自降服ひ奉ルリ一ハ即  
以皇后所杖牙樹於新羅王門爲後葉之印故其牙今猶  
樹于新羅王之門也と有る状に行はせ給へり此今と  
御紀を撰成させ給ふ今を云ふ如く神の御助有  
り却軍あり一故に及血漬さずし時の間新羅  
國ハ本よりよて其餘の韓國近も内附奉りて御奴國  
ハ成れり一あり今も斯る御勢の坐ふハ何て  
ハ神の祐け坐さるむ然るを今荒東の醜の醜或共  
却りて皇國を辱る一ハ諸國の武士共身の逸樂に耽  
て摧伏す可き勢無きハ思ハざる故に日弱りて軍  
を起す可き力も何も亡ぶ御答ゆハ非トらも畏する  
の夜の地震ふど不然御答ゆハ非トらも畏する

○日本書紀傳十

○四百十



事不備其事を古事記ハル以其御杖衝立新羅國  
主之門即以墨江大神之荒御魂為國守神而祭鎮還渡  
也と有り此を以見ると其樹を給へり御矛の  
其住吉大神の荒御魂を取託奉るを給ひて彼國の  
押へし物為させ給へる御政ある者あり然れハ其新  
羅主が門を樹させ給へるハ其荒御魂の御形実と為  
て祭鎮の置させ給ひて還り渡らせ給へる者あり  
けり此御記も漏ちるを其記を遺りたる者あり  
るて混り説ねたるハ思落され者あり彼燈火を幾  
箇に分ても本の火ハ本の火の任子減らずして猶燃  
る譬を為しれハ大人にして千慮の一失あり ○又御  
とも云へき事ありてむむ可き事ハ非ず

紀子皇后從新羅還之云々於是從軍神表筒男中筒男  
底筒男三神誨皇后曰我荒魂令祭<sup>於</sup>穴門山田邑也時穴  
門直之祖踐立津守連之祖田裳見宿祢啓于皇后曰神  
欲居之地必宜奉定則以踐立為祭荒魂之主仍祠立於  
穴門山田邑と有り此踐立田裳見宿祢二人共小供奉  
此三人等ありが其大御船を擣奉り請奉りて荒魂  
神和魂神子各相分りて其船中にて仕奉れり一状を  
所見たり備如此く新羅より還渡らせ給ひ即皇后  
の御許を離れて急々山田邑を鎮坐むと宣給へるハ  
荒魂ハ外子出て活撥く方の御魂を坐故に其御軍を



誘ふいて敵國に渡らせ給ふ時ふとこり有め事治れ  
る後ハ和魂の方を以守らせ給ふ可き筈の事ある故  
に然る御誨ハ有ける者あり可し其ハ明年二月難波  
を指て上らせ給ふ時ハ御船の能進せざりしハ務  
古水門に還坐て占へさせ給へるハ於是天照太神誨  
之曰我之荒魂不可近皇后當居御心廣田國と託給ひ  
て其御許を放し給へると同ト御事あるを曉る可き  
者あり右の穴門直ハ國造本紀に穴門國造纏向日代  
朝御世櫻井田部連同祖近伎都美命四世孫速  
都鳥命定賜國造と見えたり是あり可し此櫻井田部  
連今所見無し天孫本紀に田部連有れども其ハ  
元より非る可し若て臨時祭式に凡任吉社長門國封祖  
り猶考ふ可し

櫻

殺者令封戸佐夫運送除運功之遺進進徳分用修社新但  
豊浦郡封戸佐夫者便留充御蔭社之有る任吉社ハ上  
に謂ゆる攝津國の本宮ある事申すも更あり其豊原  
郡云々ハ此任吉坐荒御魂神社の御事あり此を御蔭  
社と申すハ和名抄に靈日本紀云美太萬一云美加奴  
と有て名義抄に出たりも美加介と云訓有り然レハ  
御蔭社と申すハ御靈社と申す義にて是即任吉本宮  
を本と為たり稱猶もて荒御魂神社を申奉れり事決き  
者あり便留と有を以て彼國ある事を知べく又其荒  
御魂神社も攝津國あり地名を以て任吉と申すを



今引る貞觀十  
七年御紀に佳吉  
荒御影神と亦見  
たりと云く是れ  
證し有るなり

以て其別社の如くあり謂有るを思ふ可く諸其御蔭  
と云ハ宝劔出現章第六一書に思頼を美多麻能布由  
と訓る其同ト事を万葉五  
二十 六下 子美多麻多麻比氏と  
有る其美多麻と御蔭と同一トハ其恩頼と云子當  
れり恩頼も御霊も御蔭も等しく蒙ると云を  
も思合す可く又其恩頼を受る事を御蔭を蒙ると云  
をも考合せて曉る可し然れハ此ハ荒和ふとの事ト  
抱はらず唯其御魂社と申すを以て御蔭社と申奉り  
來る事とふし所見たりける  
山城國愛宕郡子御蔭山  
御蔭社と申す御社有て四月中午日御祖神其社と臨

見え又同十七年十月  
八日丁巳授長門國從五  
位上住吉荒御影神正  
五位下又十二月甲申  
授長門國從四位  
下住吉荒魂神從五位  
下有ハハ十月より十一月  
迄又一階を進つ奉り  
給へり其ハ滿されり  
但十一月の度ハ二階有  
り其ハ略れり

幸有て即日還り給ふ此を御蔭祭とも御蔭山祭とも  
申す計の御事不ハ給ふ御祖神の御蔭祭とも御蔭山祭とも  
野郷大原御蔭山也と所見たり天降の御事御蔭山祭とも  
の郷大原御蔭山也と所見たり天降の御事御蔭山祭とも  
て毎年の御蔭祭とも御蔭山祭とも  
けり可し然るを天降の御事御蔭山祭とも御蔭山祭とも  
其ハ殿舎ハ雨日と皇太神言儀式帳と為る由の御事  
社を称大御蔭川神と有ハ又推古天皇御蔭山祭とも御蔭山祭とも  
能御蔭神詞講義云く御蔭山祭とも御蔭山祭とも  
必御祖神の荒御魂と御蔭山祭とも御蔭山祭とも  
事此住吉社の例以て知べし神階の御事ハ三代實錄  
小負觀元年正月二十七日甲申奉授長門國從五位下  
住吉荒魂神從五位下と有り具原好古ハ八幡本記小



山田村ハ府中の西二十八丁ニ在リ今一宮村と云ふ  
 所祭本社三神を一社とし神功皇后八幡大神高良大  
 明神諏訪大明神を合せて五社とし十二月晦日夜稚  
 海藻所の神事有り云々云々其速鞆神社ハ祭神五  
 座にて本殿ハ宗像三神を一座とし左ハ彦火と出見  
 尊右ハ尊不合尊安曇磯良豊玉姫命ありと云り但安  
 曇磯良ハ八幡愚童託志賀嶋大明神也と云レハ豊  
 彦命を誤れり云々何れも住吉大神等小由有る神  
 等ふれハ此社説実不然可し其を神社考又神社考  
 彦火と出見尊一座と為るハ今現ニ在るハ異なり  
 此社説ハ去年安政元年八月十四日赤間關より白石

ハリ備撰津あり  
 住吉神社有る  
 唯住吉神社有る  
 模津あり住吉云  
 地を以て給ふ故に住  
 吉と有るを其外ハ  
 即神名とせり故に  
 住吉と云ふは若  
 此社の御事

資陽資興父子又有馬道ふを伴ひ詣て其社人  
 聞たり趣あり其社今豊前国全救郡ニ在る長門国  
 り僅小七八町の渡あり其穴門と云ふ處の状ハ  
 潮の速き事ハ瀧津速川の如く渦の巻入るハ更  
 あり潮氣の薫れる荒浪の騒げふと云ふ速鞆と云  
 名不実と空しくざりけり斯る所ハ有レハ然る  
 神等の坐て往來の船を看行けり○又同式小筑前國  
 守給ハハ事も亦理と云べくこり  
 那珂郡住吉神社三座並名有云釋紀小私記日問如  
 此文者此三大神當在筑紫橘之小戸而今在模津國墨  
 江如何答此神荒御魂者猶筑紫但和魂獨在墨江耳案  
 神功皇后紀云元年三月皇后親為神於是審神者云今  
 不答而更後有言乎乃對曰於日向國橘小門之水底所  
 居而水葉雜之出居神名表筒男中筒男底筒男神之有



也時得神語隨教宗之然則此神本在筑前小戸即神功  
皇后初遷居於攝津墨江耳見元註式子引之任吉舊  
記も任吉大神其荒魂在筑紫之少戸と云れハ荒魂  
の筑前子坐すと云事も古く傳へたる説ありが其ハ  
右小註せる如く長門國に坐れハ此ハ子細有る事  
あり右も所見たる如く彼御名乘坐小御言ハ於水  
底所居而と有るハ其以前ハ小門の水底に坐  
たり趣多ハ其大神の生坐る本國ハ有れども  
御社ハ攝津長門より後子祀奉れり事此をも任吉神  
社と有る以知ハ然れハ荒魂ハ万葉六十三丁に任吉

乃荒人神とも詠る如く顯御身を現ハし給へる事の  
有ふとす混ハたり一説あり可き事云も更あり然  
れども此神の在筑紫之少戸と其社の所在を云る小  
就て攝小門の筑前國那珂郡に在る證と成て甚愛九  
き事已上二百八丁小註る如く此社の荒魂ありぬ  
長門國豊浦郡に任吉荒御魂神社ハ坐せらる此ハ  
唯任吉神社と有る以知ハ然れハ私記の説も釋紀  
社記の説も攝津ありが和魂に坐す故に其對ハし  
筑前ありハ荒魂ありむと推當云るあり可し因  
云右の所居字釈紀の本本文ハ所底と有る此ハ所居  
と有ハ私記の本然有故あり可し此事已任吉  
大神の下傳此社の起原を思ふ子神功皇后の御時已  
子荒魂和魂共子長門攝津と兩國に鎮坐る事御紀子



所見なり如くあるに此の後子惣ての御霊を祀れり  
て御記に既而皇后則識神教有驗更祭祀神祇躬欲  
西征爰定神田而佃之時引ナカハハミツ灘河水欲潤神田掘溝及于  
迹驚固大磐塞之不得穿溝皇后召武内宿禰捧劍鏡令  
禱祈神祇而求通溝則當時霹靂裂其磐令通水故時  
人號其溝曰裂田溝也と有る此ハ何れの神の御田と  
也歟れども上下の文を以考るに主とハ任吉大神を  
祭るに給ひし料と通えたり青柳種信説に那珂郡に  
其灘河の傍に仲村と云有り此ハ現人太明神社有  
り任吉神を祀れり古く任吉乃荒人神と云ふ事有り

又近く山田村と云有るハ神功皇后の任吉の神田と  
耕耕地令給へり地あり博田の任吉神社の本鎮り御在  
り地あり可しと云るハ甚能き考あり其邊ハ謂ゆ  
る橋小門あり一所の淺せ行て陸地と成れり地あり  
其仲村ふとハ當昔水涯ありけむと所思しければ其  
處は本より其神の御在りて顯化坐し所ふれば其神  
田の縮を以祭るに給ひし其即此社の初初也成れり有べき  
然れハ此ハ荒魂ハも非ず和魂ハも非ず唯任吉大神  
より御在り可き彼現人大明神を以て私記に荒魂と  
云ふ事の混化ありと知べし斯る事ハ土人の口碑  
より傳ふる所も亦難捨き者あり但其事實の撰免てハ  
叶ふ可神階ハ三代実録に貞觀元年正月廿七日奉授



筑前國無位住吉神從五位下と有り統紀云天平九年  
夏四月乙巳遣使於伊勢神宮大神社筑紫住吉八幡二  
社及香椎宮奉幣以告新羅無禮之状と有り此を以て  
當時即采坐一程知れたる如何ふして其時追ル  
無位あり一ありむ八幡本記は三月三日潮干祭今泉  
村の浮殿若宮大明神へ渡御若宮ハ豊玉姫命ありと  
云り豊玉姫命を若宮と申さむハ如何ふる如く是れ  
と海神と此神とハ體用の如き御間子渡りせ給へハ  
其御女を若宮と申さむ事實より由有りて所思るあり  
又同記は九月十三日大祭礼博多の吉聖社へ十二日  
渡御と有り其吉聖女の下の下照姫社と見ゆ日吉神

道秘密記にも聖女宮を下照姫命と云ふ事ありハ其  
疑ふ可き所無しと云ふ如何ふる由詳あり  
故思ふ若くハ聖母と書し又八幡本記は香椎村子  
功皇后の御事を聖母と書し又八幡本記は香椎村子  
隣ル山田村に古より神功皇后を祭れり云と有  
り其構甚廣し今尚小社存す其邊を聖母屋敷と云ふ  
是齋宮の古跡あり云と云事も有ハ其博多の行  
宮あり聖女社ハ譬ひ聖母社とハ唱へずとも彼皇后  
を祭れり所不<sub>レ</sub>○又同式壹岐嶋壹岐郡住吉神社  
と有を三代實録は貞觀元年正月廿七日甲申奉授壹  
岐嶋從五位下住吉神從五位上と有り扶桑略記は延  
喜十八年十月十五日大宰府解壹岐嶋言上平長比賣  
明神住吉明神社如太鼓鳴動御體美石出宝殿在地上  
高脚祖明神社内乱聲炎光照耀指東去飛卜部等申云











給へり事を記されあり上生海神等號少童命と  
有て重複れり海神等と有るは底中表の三神を摠  
たう事云も更あり又古事記も其如くあり既生國竟  
更生神と有る十神の中は次生<sup>海</sup>神名大綿津見神と所  
見たり此も亦<sup>重</sup>復れりありては有れども此は右三神を  
合せて大綿津見神と申す古意を明くむる端と成れ  
ば其方あり勝りたりける上あり住吉三神を合せ  
て鹽土老翁と申せり如く此は必然有ては得有る  
き所あり有ける摠と神ハ甚奇異<sup>異</sup>しく靈地あり者  
ありて右の如く海神も住吉神も各別し三柱子生

出御在り坐あり又一神と成て物為給へりあり神  
とも神と神隨ふ所あり有れば人間の上を以て敢  
て抗奉る可き事ハ非ざるなり然るハ三柱子御在  
りし所ありて何時も三神と成て物為給ひ又  
一柱として濟べき所ありて如何あり事とて一神  
よて物為給へり海宮遊行章ハ鹽土老翁と豊玉彦  
命と各一神ありが如し斯の如く分身をも合體をも  
御心の任り物為と給 住吉神ハ上り奉る如き  
事常多き御事あり 御功共の多在るを海神ハ然る聞ても無かり如く不  
れども然らず幽<sup>カケ</sup>と顯<sup>ヒキ</sup>との如く互に相扶けて物為  
させ給ふ事よて共子預給はずと云事多きあり有け  
る其ハ海宮遊行章の事を以考るに彼國より此顯國



ゆて物為る事ありありむのハ海神ハ例の由り立  
て塩土老翁ヲ頭オモテハ立給ふ可きを此ハ頭國より海  
中ヨ入らせ給ハてハ事の教正ハ難き事多故ヨ尋常  
トハ異異りて鹽土神より海神の御許ヨ送参らせ  
て其御計しひをハ乞りせさせ給へる者あり  
得たり事有り海宮旋行章ヨ凡自有海幸身自有山幸  
始兄弟二人相謂曰試欲易幸遂相易之各不得其利ト  
有る幸ハ謂ゆる徳ト云事ヨて各人の生質ヨ得たり  
所有を云あり然レハ山幸有ハ山神海幸有ハ海神ヨ  
り授け給ひ依り給へるヨ依て其道ヨ取てハ得たり  
事有り歎ルハ外ヨり企及バざら事有り又其道を  
勉行ひて幸有ふト各人ヨ依て異ある所あり然  
るヨ依人の上を羨トて其業を易る時ハ決めて幸  
らさるハ如何ト云ヨ其幸を守り可き神の守給ハ  
ざるあり其ハ人の其幸有ると云も一朝一夕の事ハ

ハ非ズ生れ出るなり其長ろ小随ひて其子ハ山幸を  
得させむ某ヨハ海幸を得させむト其幸を守りて  
長ト給へる子ハ其業を易るト捨るも其生を易へ  
君を捨る子意味等ト故ヨ其利を得る神隨の道  
ト所見たり然ルハ此ハ兄弟共ヨ其幸を相易て互  
利を得るハ當然の事ヨて始り兄弟ハ海幸を得弟  
ハ山幸を得て坐しハ彦火ト出見尊ヨ於てハ海神  
の抱りて給ふ可き事ヨ非ラ故ヨ殊更ヨ海宮ヨ幸  
行して其海神の御計しひを得させ奉る可ク鹽土神  
の教奉れりヨて此ハ歎ふ味有る所あり尚其一書  
ヨ就て云むを瑞珠盟約章あり徳亦大矣其韓一征の  
の下小註すを見て其意を得べき者あり  
時の如きハ悉くヨ住吉神の御靈ヨて海神ハヤクも  
係列らせ給ハざら如くあれども其住吉神の御守ハ  
即海神の御幸ト謂つ可き事云も更あり事ありガ  
其神を御力を戮せさせ御在り坐し事の端の物ヨ見



えたりハ八幡愚童記ノ當時常陸國在海底安曇磯良  
と云人云我足送海底年序云と云事有り此常陸  
國ハ志賀嶋を鹿嶋シカノシマと書りり彼國の鹿嶋ありむと  
心得て為し安言ふれども我足送海底年序ハ神功皇  
后御紀ノ住吉神の於日向國攝小門之水底所居而云  
いと宣へりが如くふれハ其時近海神ハ然有しあり  
可し又安曇磯良と申すハ志賀嶋大明神也と有り知  
名抄槽屋郡安曇郷有れハ其ハ志賀嶋を云あり可し  
磯良ハ磯イソ在りて彼送海底年序と有る意あり又諏訪  
熱田三嶋宗像巖嶋神等云く鹿嶋あり四十八艘船来

為給ひ云く此内梶取鹿嶋シカノシマ大明神大將軍住吉大明神  
云く一と有る鹿嶋シカノシマを常陸ヒコして其より御發船し給へり  
趣シカノシマ云ひ鹿嶋大明神とも常陸あり由ユ云々ころ僻  
事ありけれ此を志賀大神と見り時ハ寔に滯り所無  
く聞ゆ又梶取ふど云ハ如何あり事あり其よても  
者あり上あり住吉荒御神社の下シカノシマ引たり豊前國  
連鞆社説シカノシマ海神の御事を安曇磯良と云り然れど  
正シカノシマ事シカノシマ古名シカノシマハ非斯ハハ住吉大神ころ表シカノシマハ立  
給へりけれ猶海神の御カも預ハれり者あり事決  
所以ハ各國にて住吉神の坐り御社の並びハ必海  
神の鎮り御在す御事にて神名式を見りハ攝津國住



播磨国明石郡海  
 神社三座 並名神大  
 有る 津國より  
 程遠く 津國より  
 本任吉社 八郡  
 大和田社 相違  
 事 小

吉郡 大海神社二座 元名津守 氏人神 有て住吉坐神社 並名神大  
 月次相 並名神大 並び筑前國糟屋郡志加海神社三座 並名神大  
 曾新嘗 子 住吉神社三座 並名神大 坐す 如く壹岐嶋對  
 て那珂郡 住吉神社三座 並名神大 坐す 如く壹岐嶋對  
 馬鳴 子 然り然る 住吉神と大海神と共し御力  
 を合せ御在し坐す事あり 故に 遠放 トエツ 給はる  
 ろ 子 有けり 猶思ふ 神武天皇御紀東征の初  
 子 抑又聞於鹽土老翁曰東有美地青山四周云々何不  
 就而都之乎 有も其東征の御事を促奉れる 趣あり  
 子 舟師東征至速吸之門時有一漁人乘艇而至天皇招  
 之因問曰汝誰也對曰臣是國神名曰珍彦釣魚於曲浦

聞天神子来故即奉迎と有て此時の海導も御軍子  
 も功有一人ふが舊事紀に依り昔不合尊の御身小  
 ハ有けれども外戚の縁子由て海中より出来りて御  
 軍を助仕奉れりしを住吉大神の征韓の事を惣ね  
 て助奉給へり状に函と顯との塚ころハ異ありけれ  
 事實に就てハ同しけを思ふ子鹽土老翁と海神と相  
 共し彼御軍の事を助奉り給へりし事著明き者ふ不  
 び有けり 其珍彦子名を賜ひて推根津彦と云を御紀  
 部子見え 此即倭直部等祖也と見えて姓氏録に  
 護景雲三年播磨国明石郡人海直溝長等賜姓大和赤  
 石連と有る右の海神社に就て其氏人の住へりし事  
 を知べし又越後國頭城郡青海神社有る國造本紀小



久比岐國造大和直回祖と有て此其青海神社ハ海  
神ト坐して其氏人其地ト住へるが國造ト成れり  
けいと思 又上三百五十六丁ト註へる如く此大神ハ七月  
讀尊の荒御玉命トて御在し坐す事神言の古記を參  
考して知る實ハ潮の満于の月ト從ふと云も然る  
理の無てハ叶はざる者あり古事記ある錦津見大神  
の御言ハ吾掌水と有る如く潮の満于ハ海神の御心  
ある事を曉る可一萬葉額田王歌ハ月待者潮毛可  
奈比沼と有ハ潮合を待てバ月も出来れりと云事を  
詠ハルと古説ハ合る者あり三十九丁羈旅歌ハ海  
若者靈寸物香淡路鳴中尔立置而白浪半伊與尔回之

座待月開乃門從者暮去者鹽乎令滿明去者鹽乎令干  
と詠る海若ハ海神の御事トて潮を満し令干也  
為給ふ事を靈しき者ホテ哉と歎き謡へる者あり此  
トて其大神の月神の荒魂トして滄海原潮之ハ百重  
の海水を掌給ふ御事を明しむ可一備其潮の満于  
利用ハ見たり知たり今云限ハ非ずト云も魚塩の利  
用ハ云も更なり船を遣遣るハ其路ト乘て萬國の竟  
迄も巡りつ可一又若干の河水を細れて餘ク事無  
又許多の潮氣の薰滿て雨露と成て國土を潤りて  
減らす實ハ奇トとも異トとも譬言ハ無き者ハ此大



海ふるが其大海の奇しく異しきハ非ず其大海  
神の奇しく異しき御聖子あり依れり者ありけり世  
唯佳吉大神を尊む可き事耳を知て此大海神の御切  
を知りてハ何下や右の如く海中船路の往來耳限  
る事ハハ吾も人も同ト共子知ずハ此大神の  
御聖子蒙奉り居る事を得知りて有べき事ハ  
書ハ夫陽燧取火於日陰鹽取水於月後其類也月之所  
臨則水往後之故月臨卯酉則水漲午東西月臨子午則  
潮平辛南北彼竭此盈往來不絶云ハ又泰西水  
法と云物ハ海水潮汐者何也月為陰精與水同物凡寒  
宇之内濕潤陰寒皆月之主也其同物勢相就月為濕  
本濕能下施故對月而得水鳥月既下濟水亦上行欲乾  
於月故月輪所至水為之長而成潮汐也當潮長時江河  
溪間以及盆盎无處不長則氣入水為之輕潮降氣出  
水復故重云凡水族之物月望氣盈晦即氣縮故月虛  
而魚腦減月滿而蚌蛤寔也又不獨水族矣草木百昌苟  
資潤以爲生氣无不應月虧盈月滿氣滋月虛氣燥故  
上弦以後下弦以前不宜伐竹與木以爲材用是者為蠹

生氣在中也下弦以後上弦以前伐而為材即不作蠹為  
以脂潤空質而已亦猶春夏氣濕秋冬氣缺斧斤時入之  
意也由此而言月為水主月輪所在諸水上并海潮應月  
輪所在期著明矣云云如斯ハ海神ハ月  
月神の荒魂あり坐て惣てハ巨右少引り振津國大海神  
る御功多き神あり坐ける  
社を住吉社説子豊玉彦命玉依姫命と云り斯ハハ古  
事記の外ハハ大綿津見神と申す御名を神社ハ申  
せりハあり姓氏録<sup>振津國</sup>神別 阿曇大養連の下子綿神大  
和多罪神と申す御名有を以知ハハ其を又<sup>右京</sup>神別安曇  
宿祢八太造の下子綿積豊玉彦神と有り故此を以て  
其三神を合せて大綿津見神と申す豊玉彦命と申奉  
る御事を知ハハ神名式<sup>三河國</sup>宝飯郡赤日子神社を



風土記ハ所祭海神錦積豊玉彦命也安曇氏祝祭之  
有る赤日子ハ玉ニ依ル御名もて豊玉彦と申さ  
が如くある可右の豊玉彦神の御名の所田ハ海宮  
搦行章ニ至リて説べく又赤日子神  
と申す神名も其所合せて云を待はり○安曇連等所祭神也ハ古事記  
ハハ阿曇連等之祖神以伊都久神也と有り舊事記  
亦此三神者阿曇連等齋祠筑紫斯香神と有て殊  
其所在の明らるるハ甚く愛た安曇連の事ハ此  
神社の事と説畢  
て次ハ古事記の文を奉て件々説を待べき所祭を  
ふり今茲ニ云てハ入混いて難分けルハあり  
此の如く伊都伎祭と訓ハ瑞珠盟約章ニ筑紫胸  
肩若等所祭神是也と有り是より其第三一書ハ祭

字を然訓ハ宝劔出現章ハ崇秘と書レたり古事  
記ハ吾者伊都岐奉于倭之青垣東山上とハ如拜吾  
前伊都岐奉云と此二柱神者拜祭佐久ハ斯侶伊須受  
能言不とも所見たり備此の所祭を右の如く舊事記  
ハ齋祠と有る耳不らず右ハ引  
瑞珠盟約章ふるも同ト訓みくを以て其第一書  
ハ為天孫所祭也と有るも古史徴ハ伊都伎奉礼と訓  
ルハ説の當ルを知ハ外ニハ伊都久ハ古事  
斯レ證の有る上ハ論ハ無き事あり  
記玉垣子葦原色許男大神以伊都久祝とも有て其神  
子傳子仕奉る神主又ハ祝ふと云語あり記傳六十六  
六丁伊都久ハ齋あり万葉十九三十丁住吉ハ伊都久  
祝之神言等又三十丁春日野ハ伊都久三諸乃あり



と有り如し倭伊都久伊波布而どの伊ハ上三百子  
も己子云云如く其一言子て齋の義ハ盡せり都久  
ハ仕又ハ附又託と云云同トトて伊都久ハ齋附ト云事と聞え  
伊波布ハ齋侍齋ト云事と聞えたり齋内親王奉入時詞  
ハ齋内親王波依恒例兵三年齋比清麻波理兵御杖代  
止進給と有ハ皇太神宮の齋王と為て奉らせ給ふ不  
るを崇神天皇六年御記子以天照太神託豊鍬入姫命  
祭於倭笠縫邑と有る此子て齋附の意ハ知る可し  
又垂仁天皇二十五年御記子離天照太神於豊稻姫命  
託于倭姫命云々故隨太神教其祠立於伊勢國因興齋

宮于五十鈴川上是謂磯宮と有る太神宮を齋宮と申  
すハ非ず皇太神を倭姫命鎮奉りての齋齋奉終ふ宮の義子  
て宮ハ皇太神の大宮齋イサキハ倭姫命の御事あり能し文  
意を照して辨ふ可し又此等を以て伊都岐の齋仕又  
ハ齋附の字の義ありとも曉ら可き者あり伊波布も  
トキ故ハ其齋王の御事を確略天皇元年御記子推足  
姫皇女侍伊勢太神祠と有て祠字を伊波比と訓せり  
も齋侍子て齋附と其義の然しも異異ありざら改  
あり又右子引る舊事紀の齋字を伊波比と訓るをも  
考ふ可し此御社の事ハ記傳六六十子官帳子筑前國  
糟屋郡志加海神社三座並名と有る是あり式今本子  
海神社を宇美能神社と訓るハ非事あり和多都美能



神社之訓ハ三代實錄ハ貞觀元年正月廿七日甲申  
奉授筑前國後五位下志賀海神從五位上と見ゆ此御  
社志賀嶋と云キ在テ今ハ那珂郡ヲ屬リテ予福岡ヨ  
リ海上三里あり景行天皇御紀ハ志我神と有リと云  
ルルリ其ハ十二年の下ハ天皇將討賊次于柏峽大野  
其野有石長六尺廣三尺厚一尺五寸天皇祈之曰朕得  
滅土蜘蛛者將蹶茲石如拍葉而舉焉因蹶之則如拍上  
於大虛故號其石曰蹈石也是時禱神則志我神直入物  
部神直入中臣神三神笑と有リ是ヨテ當昔筑紫の内  
心心ハ甚ル名高キ大神ヲ坐リ一一事推テ知ヘキ者不

リ叙紀ハ志我神の下ハ右の志加海神社を引たり  
備直入物部神直入中臣神ハ神名式ハ見エ給ハ  
ナ外ハ所見無キハ是ハ可憐可憐事あり此時の状を  
思ふハ志我神ハ海神ハ渡シセ給ヘとも武勇キ神  
子御在在ヲ以テ事ノ神ヲ坐リ故あり猶其御紀の傳  
ハ之之又記傳ハ万葉七七丁丁ハ千磐破金之三崎乎過鞆  
吾者不忘牡鹿之須賣神又十六ハ糟屋郡志賀村和名  
抄同郡ハ志訶郷有リ書記釋ハ風土記を引テ糟屋郡  
資訶嶋昔時氣長足姫姫尊幸於新羅之時御船夜時來泊  
此嶋有陪從名云大濱ハ濱者便勅小濱遣此嶋覓火得早  
來大濱問云近有家耶小濱答云此嶋與打昇濱近相連  
接殆可謂同地因曰近嶋今訶謂之資訶嶋と有リ此處



金鹿<sup>ニ</sup>子<sup>ノ</sup>誤り  
 上引<sup>ル</sup>八幡<sup>ノ</sup>志  
 童<sup>ノ</sup>記<sup>ニ</sup>海神<sup>ノ</sup>  
 帝<sup>ノ</sup>位<sup>ノ</sup>底<sup>ノ</sup>鳴<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>殺  
 船<sup>ノ</sup>給<sup>ル</sup>如<sup>ク</sup>云<sup>フ</sup>  
 誤<sup>ト</sup>亦<sup>モ</sup>出<sup>ル</sup>未<sup>レ</sup>ハ<sup>リ</sup>不<sup>レ</sup>

八万葉歌<sup>ニ</sup>多<sup>ク</sup>も多<sup>ク</sup>所見<sup>テ</sup>名高<sup>キ</sup>地<sup>ナ</sup>り其<sup>ノ</sup>万葉  
 十數<sup>ノ</sup>所出<sup>ル</sup>底<sup>ニ</sup>も四可<sup>ト</sup>も之<sup>ノ</sup>加<sup>ト</sup>も書<sup>キ</sup>其<sup>ノ</sup>外<sup>ニ</sup>古  
 書<sup>ニ</sup>共<sup>ニ</sup>多<sup>ク</sup>ハ清音<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>用<sup>ヒ</sup>九<sup>レ</sup>ハ加<sup>ヲ</sup>清<sup>ハ</sup>キ<sup>ク</sup>あり  
 今<sup>レ</sup>も清<sup>テ</sup>呼<sup>ブ</sup>マ<sup>ズ</sup>と所見<sup>ナ</sup>り其<sup>ノ</sup>大瀆<sup>ノ</sup>宿<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>人<sup>ハ</sup>  
 阿曇<sup>連</sup>祖<sup>大瀆</sup>宿<sup>祚</sup>と見え<sup>ル</sup>人<sup>ナ</sup>り其<sup>ノ</sup>下<sup>ニ</sup>引<sup>ク</sup>  
 見<sup>テ</sup>知<sup>ベ</sup>し其<sup>ノ</sup>資<sup>詞</sup>鳴<sup>ノ</sup>近<sup>嶋</sup>あり<sup>し</sup>故<sup>事</sup>相<sup>類</sup>たり  
 事<sup>ハ</sup>肥<sup>前</sup>風<sup>土</sup>記<sup>ニ</sup>更<sup>勅</sup>云<sup>フ</sup>此<sup>嶋</sup>遠<sup>猶</sup>見<sup>知</sup>近<sup>可</sup>謂<sup>レ</sup>値  
 嘉<sup>嶋</sup>或<sup>有</sup>二<sup>百</sup>餘<sup>近</sup>嶋<sup>或</sup>有<sup>三</sup>十<sup>餘</sup>近<sup>嶋</sup>と有<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>  
 也<sup>ノ</sup>平<sup>陽</sup>古<sup>傳</sup>古<sup>事</sup>記<sup>ニ</sup>阿曇<sup>連</sup>等<sup>之</sup>祖<sup>神</sup>以<sup>伊</sup>都<sup>久</sup>  
 神<sup>也</sup>と有<sup>ル</sup>を以<sup>テ</sup>思<sup>フ</sup>其<sup>ノ</sup>海<sup>神</sup>之<sup>御</sup>裔<sup>ノ</sup>安曇<sup>氏</sup>ハ此  
 邊<sup>ニ</sup>住<sup>テ</sup>在<sup>リ</sup>者<sup>ナ</sup>り事<sup>知</sup>名<sup>抄</sup>當<sup>郡</sup>安曇<sup>郷</sup>云<sup>フ</sup>  
 所見<sup>ル</sup>を以<sup>テ</sup>知<sup>ベ</sup>し大同<sup>類</sup>聚<sup>方</sup>道<sup>反</sup>藥<sup>筑</sup>前<sup>國</sup>阿

國

此<sup>ノ</sup>蘇<sup>垣</sup>内<sup>ノ</sup>翁<sup>説</sup>  
 出<sup>羽</sup>田<sup>秋</sup>人<sup>鳥</sup>屋<sup>長</sup>  
 秋<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>問<sup>ニ</sup>答<sup>ラ</sup>  
 九<sup>レ</sup>を<sup>取</sup>中<sup>見</sup>見<sup>タ</sup>  
 引<sup>ク</sup>記<sup>傳</sup>説<sup>ニ</sup>  
 海<sup>入</sup>津<sup>持</sup>と有<sup>リ</sup>

曇連<sup>等</sup>之<sup>方</sup>元<sup>伊</sup>井<sup>諾</sup>尊<sup>傳</sup>方<sup>と</sup>有<sup>ル</sup>多<sup>ク</sup>斯<sup>ク</sup>古<sup>方</sup>を<sup>傳</sup>  
 有<sup>テ</sup>り<sup>し</sup>を以<sup>テ</sup>神<sup>代</sup>以<sup>來</sup>其<sup>ノ</sup>海<sup>神</sup>之<sup>御</sup>裔<sup>ノ</sup>此<sup>處</sup>ニ<sup>土</sup>  
 著<sup>居</sup>て其<sup>ノ</sup>祖<sup>神</sup>ニ<sup>仕</sup>奉<sup>リ</sup>兼<sup>テ</sup>海<sup>ノ</sup>事<sup>ヲ</sup>預<sup>リ</sup>知<sup>レ</sup>り  
 其<sup>ノ</sup>職<sup>即</sup>て氏<sup>名</sup>とハ成<sup>ル</sup>り本<sup>居</sup>大<sup>平</sup>主<sup>説</sup>子<sup>阿</sup>  
 曇<sup>ハ</sup>預<sup>海</sup>み<sup>テ</sup>海<sup>ノ</sup>事<sup>ヲ</sup>預<sup>掌</sup>ル<sup>リ</sup>云<sup>フ</sup>ハ實<sup>ニ</sup>然<sup>ル</sup>  
 事<sup>ナ</sup>り祖<sup>神</sup>ノ<sup>事</sup>ハ此<sup>次</sup>ニ<sup>云</sup>べし然<sup>レ</sup>ハ諸<sup>國</sup>ニ<sup>阿</sup>  
 成<sup>ル</sup>就<sup>テ</sup>名<sup>ト</sup>ハ幡<sup>本</sup>記<sup>ニ</sup>志<sup>加</sup>大<sup>神</sup>ハ三<sup>處</sup>ニ<sup>鎮</sup>座<sup>シ</sup>  
 給<sup>ル</sup>底<sup>津</sup>海<sup>童</sup>命<sup>ハ</sup>島<sup>ノ</sup>東<sup>ノ</sup>出<sup>崎</sup>ニ<sup>鎮</sup>座<sup>シ</sup>給<sup>ル</sup>中<sup>津</sup>  
 海<sup>童</sup>ハ勝<sup>間</sup>ニ<sup>鎮</sup>座<sup>シ</sup>給<sup>ル</sup>中<sup>津</sup>明<sup>神</sup>と云<sup>フ</sup>表<sup>津</sup>海<sup>童</sup>  
 命<sup>ハ</sup>同<sup>村</sup>ニ<sup>在</sup>り民<sup>俗</sup>勝<sup>間</sup>明<sup>神</sup>と云<sup>フ</sup>と云<sup>フ</sup>又<sup>其</sup>勝

日本書紀傳十

四百二十八



間と云地名も床しき事あり其故ハ海宮遊行章子塩  
土老翁乃作<sup>イ</sup>免間籠<sup>イ</sup>彦火<sup>イ</sup>出見尊於籠中<sup>イ</sup>沈之<sup>イ</sup>于海  
云々忽至海神之宮<sup>イ</sup>有る其故事<sup>イ</sup>依れ<sup>イ</sup>る名<sup>イ</sup>之聞え  
又其第<sup>イ</sup>ハ一書<sup>イ</sup>子海神所乘駿馬者<sup>イ</sup>ハ尋<sup>イ</sup>鱈也云々在<sup>イ</sup>播  
之<sup>イ</sup>小戸<sup>イ</sup>と見え<sup>イ</sup>たり其<sup>イ</sup>ハ上<sup>イ</sup>子註<sup>イ</sup>せり如<sup>イ</sup>く其志加島<sup>イ</sup>子  
相向<sup>イ</sup>へり耶珂郡<sup>イ</sup>の海邊<sup>イ</sup>ふれ<sup>イ</sup>ば由<sup>イ</sup>有る事<sup>イ</sup>云も更<sup>イ</sup>あり  
又此<sup>イ</sup>子就<sup>イ</sup>て其海宮<sup>イ</sup>ハ其志加島<sup>イ</sup>の海中<sup>イ</sup>あり事<sup>イ</sup>も所知  
て旁<sup>イ</sup>由有<sup>イ</sup>るハ勝間<sup>イ</sup>も其<sup>イ</sup>子依<sup>イ</sup>る地名<sup>イ</sup>あり事<sup>イ</sup>知<sup>イ</sup>べし又  
神名式<sup>イ</sup>子丹後國<sup>イ</sup>與謝郡<sup>イ</sup>籠神社<sup>イ</sup>名<sup>イ</sup>神大月<sup>イ</sup>有<sup>イ</sup>り此<sup>イ</sup>子一  
宮記<sup>イ</sup>又前太平記<sup>イ</sup>ふ<sup>イ</sup>るハ住吉<sup>イ</sup>同體<sup>イ</sup>と有<sup>イ</sup>る似<sup>イ</sup>着<sup>イ</sup>たり

説<sup>イ</sup>して此<sup>イ</sup>ハ海神<sup>イ</sup>子御在<sup>イ</sup>す可<sup>イ</sup>し其<sup>イ</sup>ハ同式<sup>イ</sup>但馬國<sup>イ</sup>朝来  
郡粟鹿神社<sup>イ</sup>名<sup>イ</sup>神<sup>イ</sup>を一宮<sup>イ</sup>記<sup>イ</sup>し上<sup>イ</sup>社彦火<sup>イ</sup>出見尊<sup>イ</sup>中社  
籠神<sup>イ</sup>下社豊玉<sup>イ</sup>姫神<sup>イ</sup>云<sup>イ</sup>と有<sup>イ</sup>り然<sup>イ</sup>れ<sup>イ</sup>ハ其<sup>イ</sup>籠神<sup>イ</sup>ハ豊玉  
彦神<sup>イ</sup>子御在<sup>イ</sup>す可<sup>イ</sup>き事例<sup>イ</sup>を以<sup>イ</sup>知<sup>イ</sup>べし故<sup>イ</sup>此<sup>イ</sup>二<sup>イ</sup>の籠<sup>イ</sup>も勝  
間<sup>イ</sup>と訓<sup>イ</sup>へき<sup>イ</sup>と志加<sup>イ</sup>の勝間<sup>イ</sup>より移<sup>イ</sup>祀<sup>イ</sup>へ<sup>イ</sup>る神<sup>イ</sup>あり事  
申<sup>イ</sup>すも更<sup>イ</sup>あり事<sup>イ</sup>あり<sup>イ</sup>し右<sup>イ</sup>の籠<sup>イ</sup>ハ水分<sup>イ</sup>神<sup>イ</sup>あり<sup>イ</sup>て  
今<sup>イ</sup>説<sup>イ</sup>を<sup>イ</sup>守<sup>イ</sup>居<sup>イ</sup>たり<sup>イ</sup>ハ中<sup>イ</sup>子思<sup>イ</sup>慮<sup>イ</sup>の及<sup>イ</sup>ハ<sup>イ</sup>たり<sup>イ</sup>事<sup>イ</sup>あり  
けり又<sup>イ</sup>撰津國<sup>イ</sup>住吉郡<sup>イ</sup>子勝間<sup>イ</sup>と云<sup>イ</sup>地<sup>イ</sup>有<sup>イ</sup>り万葉<sup>イ</sup>十六<sup>イ</sup>九<sup>イ</sup>  
丁<sup>イ</sup>子勝間<sup>イ</sup>田<sup>イ</sup>之池<sup>イ</sup>と有<sup>イ</sup>る是<sup>イ</sup>子<sup>イ</sup>此<sup>イ</sup>等<sup>イ</sup>ハ同<sup>イ</sup>郡<sup>イ</sup>子大海<sup>イ</sup>神  
社<sup>イ</sup>の坐<sup>イ</sup>す<sup>イ</sup>る<sup>イ</sup>殊<sup>イ</sup>子由<sup>イ</sup>有<sup>イ</sup>べき<sup>イ</sup>と此<sup>イ</sup>等<sup>イ</sup>の事<sup>イ</sup>ハ海宮<sup>イ</sup>遊



△物部

△和名抄に物部郷  
見たりハ其本  
を依羅連ハ右の  
津ありとい別あり  
事云し更あり

行章子就て云べし  
又思ふに神名式に同郡大依羅神  
社四座並名神大月次相嘗新嘗と  
有る依羅ハ典謝海子て右の籠神社を移奉らるる  
部同祖彦坐命之後也と有る其彦坐命の御子  
波道主命遣丹波と有る其彦坐命の御子  
孫大連之後也と有る孫彦坐命の御子  
孫多波連公依羅連等祖と見え推古天皇十六年  
後國典謝郡籠神社の次日物部神社と云ふ見  
を諸書に右の典謝海を依羅と云ふ然らば籠  
りて大依羅神社と申す本を忘れ九宮郡子移  
り可き所有を知べし然らば其大依羅神社四座  
中子一座ハ右の籠神にて海神に渡り給ふ可  
知べし雄略天皇二十二年御紀に丹波國餘社部  
人水江浦島子乘舟而釣遂得大龜化為女云々相  
入海到蓬萊山と有る也海神の出宮又其海底子  
と所思由る也又考ふ可き諸座返りて神功皇右御

網

紀子神有誨曰和魂云々荒魂云々と有る下子因以依  
網吾彦岳見為祭神主と有る想ての神に係らる事  
其地名を以て云ふ也其岳見てふ人名に係らる  
子註す可し其○神名式に播磨國明石郡海神社三座並  
神記傳六十六子此を今本に多流美と訓るハ僻事不  
大記傳六十七子此を今本に多流美と訓るハ僻事不  
り其ハ此社岳見村子坐故子推當子訓る可し若  
其ありハ岳字脱らるるも思へど臨時祭式も三代  
実録にも唯海神と有るハ脱字子非ず又海の一字を  
然訓む例も無き者をや然らば此ハ和多都美能神社  
と訓べき者ありと云化らる実子然ら言ふぐ此子  
説有り和名抄子岳見多留郷有る其地名を以て然ら

△月次新嘗  
今神中扱三はハ  
撰津と播磨と  
の境ハ多流美  
と云所首り壺  
水と書り岸よ  
り得と云ぬ水  
出ら故ハ壺水  
と云ふり壺水  
の朋神と申す神  
御在す云と有  
ハ此海神社を云  
ふ然らして



訓も出来れり有りぬ其始を思ふに然る可く  
亦む有ぬ其神功皇后御紀に既而神有誨曰知魂服  
玉身而守寿命荒魂為先鋒而導師船即得神教而拜禮  
之因以依羅吾彦男虫見為祭神主と有る此主とい  
住吉大神に係て書されたる事有りぬ其大神  
と大海大神とい御功も何も大凡一ありが如き故に  
已く傳漏しふどもや為けむ猶も其海神の御事とて  
ハ記されざるを此と神名式とハ幡愚童記ふども且  
其端緒見えて上より下より其御功を千重の一重  
も顯ハし奉る事と成れり其海を多流美と其地名

を訓と成せり多む渡津海の底に沈けり白玉の光見  
る心ちて辱しとも辱しとも云知ぬ御事有りけ  
る上引る愚童記に御突船一笠一所を常陸国と云  
るころハ僻事多し鹿嶋と云るハ志加島より訛れり  
あり其志賀嶋大明神を安曇磯良と申すころ異しき  
御名ありけれ安曇の磯に在る神と聞く時ハ又此も  
由有る事あり又梶取ハ鹿嶋大明神と云るも志賀嶋  
大明神と訓て大に其説を明しるハ為るも至り然  
レハ斯る云ふも足ぬ書ハルハ或ハ神社の傳記古老の  
口傳を載せて又皇典の關漏を補ふも是れ多事有  
る者なり且神名式ハ壹岐島壹岐郡住吉神社名神大  
石田郡海神社大對馬島上縣郡和多郡美神社名神大  
和多郡美御子神社名神大下縣郡和多郡美神社名神大  
大住吉神社名神大和多郡美神社名神大此等ハ古ハ  
國へ往來ふも就て住吉神と共ハ祀りたりとも云ハ  
給ハざる者其始神功皇后の御時ハ祭りて  
たりふと云可なりや熟し事の状をも思ふ可き者

○日本書紀傳十

○四百三十一







△後日明石國送ふ  
いし出来りこと  
其祀は初なり

ありす 其依羅吾彦の本貫ハ丹後國與謝郡トツクニに有け  
らば 其カマノカミ菟神と称マテす 海神御社の子仕奉りて有つし申縁  
ありて以て其師船祭るを給ふ神のとして合仕奉給りけ  
り事竟て後次々其社を定めさせ給ふハ何れハ  
供奉の人小託て鎮奉りせ給へるを此より前齋垣意堅王天皇  
の山陵を作り皇后を赤石と待て拒奉りむと為り  
ハ令逐給へりし其時ふとや神其見の御諭の有て其赤石  
ハ齋初なりけむく其人名を以て地名と呼び又  
終ニ郷名とハ成れり者あり然るハ其山陵亦其齋見  
村ニ在る御紀ニ興山陵於赤石と有れハ其より以前

△國造本記明石國  
送輕島豐明朝  
御世大倭直同祖ハ  
代足尾見都都自足  
尾定賜國造と有

ハ齋見と云名の有りし事知べし然して齋見ハ其  
より攝津國に移り住へり又本貫の菟神を請奉  
りて大依羅神社を祀奉り終ニ其オケラ子土着く事ハ成  
れり者ありむと推量り知れり但此ハ餘り不  
ハ有れり古より今に至る迄ニ住吉大神の御事  
ハ耳誰もカを入て説く事ありハ大海大神の御功  
の較略をた不知れり人の心きが憶ろし此  
く説明の奉りて其可否しハ其大神子正一奉  
を憚りて人の思ふ所ニ統紀ハ神護景雲三年六月丁  
酉朔癸卯播磨國明石郡人外從八位下海直溝長等十  
九人賜姓大和赤石連び有る此も其大神子由有る氏人不  
り其遠祖稚根津彦命ハ其海神の外曾孫あり事舊事







十五年御紀小大倭直祖長尾市宿禰と見え姓氏録  
大和国小大和宿禰出直推根津彦命云々有て其倭  
神別大和魂神の御末とも無き人を祭神主と請給ふ事如  
何あり申とも得知ずてあむ有けり今此考成り  
就て彼此思合すり實に謂有る御事あり有けり  
其八大倭神社註進状に依り祭神倭大和魂神相殿神  
二座八千戈神御歳神あり古事記に此八千矛神持  
高志國沼河北賣幸行之時云々と有る其沼河北賣を  
出雲風土記に嶋根郡美保郷所造天下大神命娶高志  
國坐神意支都久志為命子儷都久志為命子奴奈宜波

比賣命而令産神御穂須美命云々見えたり意支  
都俾都北海の沖邊を云るが意支都儷都と云と  
切て云るよて実には奥津筑紫居邊津筑紫居よて若  
くは海神の御子よて筑紫に坐し申の御名よとや  
有む筑紫は着嶋よて古ハ大倭の方子聯きて有し田の名  
御紀に但馬出嶋人太耳廿云々と有る出嶋を古事記  
に伊豆志と有る以知べし借其高志坐神と云ふ就て  
考ふに此領城郡ハ能登國と相向ふ地あり神名式  
に能登國羽咋郡相見神社和名枚小大海於保美郷と  
云ふ是より同郡奈豆美比咩神社今阿津見村に在り  
由能登國名勝志に云るも安曇言相通ひ又瀬戸比  
古神社に由有り能登郡荒石比古神社鳳至郡奥津比  
咩神社邊津比咩神社あり有る皆海神に由有る思ふ  
可其沼河北賣命に御娶坐て令産給へりし御穂須



美命ハ後ハ建御名方神ト申一ト神名式ハ信濃國諏  
訪郡南方ハ美神社大神ト有リ是ヨテ上諏訪下諏訪  
ト二社アリト熱田神社記ハ高志沼河姫姫信濃國下諏  
訪神社也ト云フモ古説ト聞エテ猶記傳六六丁  
日字都志日金折命ノ字都志ハ顯子日金ハ式子信  
濃國更級郡氷鉈斗賣神社和名折子同郡氷鉈比加鄉  
又斗女女鄉有リ其故ハ彼國ト安曇郷ト有テ其郡ト  
穗高神社大神式子見エテ姓氏録子安曇宿禰海神綿  
積豊玉彦神子穗高見命之後也又安曇連綿積神見高  
兒高見命之後也亦ト有ルハ多リ又彼國ト佐久郡有

リ此ト申フヤ猶如此其國子此氏ノ申有リ事ハ未考  
ズト云ルハ乃カ上古ハ信濃國ハ悉ク大高海高海ト  
テ有ケルヲ穗高見命ハ大高海命高見命ハ唯子高  
海命ノ義ヨテ其高海ト有ツ程彼大海神ノ御子  
宇都志日金折命亦名穗高見命亦ト本國アリ筑紫  
ヨリ來坐テ其大湖を主領キ居給ヘテ其御名ト  
モ負坐テ耳アリズ其湖水の涸テ唯諏訪海の遺ルセ  
ト成ても其地名亦ト右ノ如ク傳ハレテを以テ  
彼意支都久志為命傳都久志為命亦ト其大海神の  
子神亦トハ非トウト然云アリ此ハ信ノ難キ書



右の安曇郡水鏡  
 郡の安曇郡水鏡  
 事ハ更ニ和名抄御  
 名ハ水内郡大島中島  
 埴科郡磯部郡中島  
 郡海部郡見元等  
 皆海に依りて名あり  
 之を知べし又水内郡と  
 云ふ由有り猶

子ハ有れども神名帳頭註ニ皇后歸座之後一神留攝  
 津國住吉郡今住吉大明神是也一神奉崇信濃國諏訪  
 郡今諏訪大明神是也と有る必子細有べき事を知  
 べき者あり故其大和太神と大海大神と御由縁坐小  
 依此時追追らる給へると申す建御名方神其諏訪ハ留給へると云々又然る  
 由縁の有を以て事云々更あり信濃國の皆  
 天皇四十年御紀ニ云べし此を以て見れば鹽あつて海  
 を大海神の所知せし事と可思く和名抄近江  
 國伊香郡安曇郡有り又滋賀郡ハ景行天皇の志賀高  
 元穂宮と云ふ志賀ハ後名子て筑前より取れる郡名  
 ありと知然れば海神の裔とも云べき大和氏の彼  
 海神社此青海神社ニ仕奉れるハ當然の事とて今云

限ハ非々を倭大國魂神の其氏人の祭を乞はせさ  
 せ給へるも亦右の由縁有を以て大同類聚方子表  
 志越後國頸城郡主帳無位滄海臣車持等家方大己貴  
 神傳云々勅方奴奈川藥と有る滄海臣ハ青海神社ニ  
 依りて氏姓もて大己貴神の方を傳はるも大和直同  
 族なり故あり又神名式ニ同郡奴奈川神社和名汝  
 子沼川波乃郷有て青海の地ハ其子在り此子就て思ふ子  
 蒲原郡青海神社ニ座と有る一座ハ本より海神子坐  
 一一座ハ倭大國魂神と云ふハ坐トウ此社今加茂村  
 と云地子立せ御在り坐り此青海神社と云ふ神階の  
 事見えざるハ京より遠く



又若狹國大飯  
郡青海神社有り

放ハ故ク可シ其奴奈川神社ハ瓊之川ヲ海神  
を豊玉彦神豊玉姫神ト申すハ申有り又曰郡大神社  
居多神社ト有ハ其奴奈川神社ノ縁ニ  
大和直等ト由有ル神子坐シ思合テ可シ○神名式  
子紀伊國那賀郡海神社有り又名草郡子堅真神社有  
也上子註セ如ク海神子所由有ル事丹後國籠神社  
の例ヲ以テ稽テ可ク或書シ祀神ニ座豊玉彦命國津  
姫命本國神名帳ニ從五位上浦上國津姫大神正二位  
豊海神ト見エ三代實錄ハ仁和元年十二月己卯授紀  
伊國正六位上浦上國津姫神從五位下ト有ハ當社不  
り社傳云豊海神ト申奉ルハ豊玉彦命ノ亦名ニして  
上世子ハ熊野の揃ヶ崎子坐シけるヲ何レの御世子

揃ヶ崎ハ増是法師  
が遺座ト云物ト十月  
十日許熊野ハ諸レ程  
子云ハ御山ト看ル程  
日本下毎ニ手向神多  
在ルハ云ハ其ノ三  
と云日御山ト看ル云  
花の座ノ許ニ近ク者ハ云  
又四十九ノ座ノ許ニ  
至ル云ハ揃ヶ崎ト云  
有ル神ノ戦ヒト云  
所ト揃ヶ崎ト云ハ  
云ハ有ル巖ト有ル者  
云ハ有ル地ト有ル者  
云ハ有ル見ル者

院

此社地子遷座ト給テ浦上國津姫神ハ和泉國の海中  
より現ルハ水ハ恰ハ大木峠を越テ神通畑子暫ク坐シて此  
地子鎮坐ト給テ云ハ云ハ云ハ其國津姫神ト豊玉姫命  
り玉依姫命ノ内子有ハ大嘗會儀子九月上旬  
神祇官差ト部三人申官差遣紀伊淡路阿波等監作由  
加物各到國大被テ紀伊國云ハ並令賀多磨女十人  
量程採備其幣ト見エ之ト和名枚郡名子海部阿ト  
有ハ此海神社子程ハ隔ル也故由無ルト也ハ右  
堅真神社ヲ一本ト堅真音ト有ル三代實錄子貞觀元  
年五月二十六日紀伊國正六位上堅真音神從五位上  
と有ルハ其方宜ト社説子祭神ト吾田鹿又神名  
葦津姫命ト云ハ然レハ予ノ今云ハ異ル者

○日本書紀傳十

○四百三十七



式二年妻郡海神社三座之有ハ筑前播磨ふとの如ク  
三神の任りて祭れりるる備右の那賀郡あり見海を  
阿麻と訓ちる事ふれども和多都美と訓べき事右に  
註せりが如ク或説ハ本宮庄本宮村の東八町許に七  
越峯と云有る其東面六七町許山腰に  
在り備此祀伊国子五十給へり二社ハ神武天皇御  
紀子母曰玉依姫海童之女也と見え又遂越狭野到熊  
野神邑且登天磐盾仍引軍漸進海中卒遇暴風皇舟漂  
蕩時稻飯命乃歎曰嗟乎吾祖則天神母則海神云云言  
訖乃拔劍入海化為鋤持神三毛の野命亦恨之曰我母  
及姨並是海神何為起波瀾以灌溺乎云云と有るが如ク

此天皇少ハ殊小ニ無ク親一き神子坐ければ右の社  
ハ其時ニ祀ハセ給ひけり少々増基ケ々ニ云記  
行ハ指ケ崎ト云所有り指ト衝ク々ニ様ナク巖共有り  
と有て其ハ海濱あり此熊野あり然る山中ニ海  
神を祭れり事似着ハ一くさるハ彼天皇亦一祀  
ハセ給へりけむ然るを南紀神社録ト云物ハ熊野地  
主神社高倉下命也社家祖神と見えたる其ハ天孫本  
紀ハ簀ノ高倉下命ハ天火明命子ナて其ハ大明命の  
背命海部直等祖ト有るを見れば國ノの海神社の中  
ニハ此熊野より其氏人の移住ヲ就て遷奉ルも



今昔又同郡縣神社と  
 今山田并縣大明神と  
 甲申三月廿七日  
 攝正成朝臣の祈願文  
 を讀みたる夫以由  
 中坐和多都美神社者  
 百王鎮護之靈神而  
 不測之神體也云々  
 有れば其月坐多  
 可一姓氏録、縣使  
 百字麻呂府進命之  
 後也と有る其火明  
 命の御子乎左の  
 海神社と同一由多  
 可一又合刀神社有  
 海の縁に此三社并  
 天孫本紀に天火明命  
 十世孫於夜別命大海  
 部直等祖云々此淡  
 夜別阿波國分ル  
 乃る意なきも考  
 上可なり  
 又神名式、陸奥國  
 和夫郡海神社三條  
 此の事、同、言  
 可、事、有、傳、十、卷  
 三十一、二十三、卷、三、  
 三十一、(一)

選

亦有ぬ可き事なり神名式に但馬國城崎郡海神社名  
 大と有る海を例の阿麻と訓ハ非子れども姓氏録但  
 馬海直火明命之後也と有るは紀伊の熊野より別  
 此乃る小ハ非ト祭神ハ其氏人の仕奉ル大海神  
 小坐す事申すも更あり又山代直火明命之後也とも  
 賀郡山代郡海部郷者も由有り三代実録ハ阿波國那  
 年 月 山代郡寸大海全子以奉幣氏神向阿波國と有  
 リ然るハ海神社の見えざるハ官帳に載るハ其故  
 多可一ハ名方郡和多都美豊玉比賣神社有れば其  
 とハ別あり三代実録ハ阿波國名東郡人安曇栗麻呂  
 と云人名見え又三代格ハ阿波國安曇郡と有る其不  
 り可一其委しき事ハ皇極天皇御紀 ○又同式子壹岐  
 阿曇山背連比良夫の下に云へり  
 國石田郡海神社 三代実録子貞觀元年正月廿七日

又同郡阿多神社  
 阿多神社と同一  
 又流後記に對馬島上  
 縣郡無位和多都美  
 神下縣郡無位和多  
 都美神並奉授位  
 五位下と見ゆ又

甲申奉授壹岐嶋後五位下海神從五位上と見えたり  
 此より壹岐郡住吉神社 名神 と共々大社の列に渡り  
 せ給ふ事ハ彼神功皇后の御軍を扶奉りて給へり  
 由ふとの御在して祀ハ此御在し坐けし程想像奉り  
 可く多む 此事已の上云り次あり對馬嶋多も此  
 箇城村所祭豊 又對馬嶋上縣郡和多都美神社 名神 下  
 王彦神と有り 和多都美神社と云社有り三  
 縣郡和多都美神社 名神 和多都美神社と云社有り三  
 代実録子貞觀元年正月廿七日甲申奉授對馬嶋從五  
 位下和多都美神從五位上と有る此神階ハ右の名神  
 大二社子係れりあり其ハ同十二年三月五日丁巳詔



授對馬嶋從五位上和多都美神云、和多都美神並正  
 五位下之有て二神共子元從五位上ありを以知べし  
 又授從五位下和多都美神從五位上之有ハ次あり名  
 神大子ぬ方ハ神階あり其上縣郡ありハ祭神其和  
 多都美神之神功皇后之並びて今三根郷木坂村子坐  
 下縣郡ありハ國府子坐すと云り其小社あり和多都美神社ハ仁位  
 御仁井村子坐て神主安曇氏ありと云り當國子ハ  
 住吉神社ハ名神大子ハ有れども唯一社耳あり和多都  
 多都美神ハ右の如く三社坐か上ハ神功皇后の御時  
 美御子神社名神大子ハ共子坐るハ神功皇后の御時  
 坐し子依依ハ事云も更あり其上縣郡和多都美御  
 子神社名神大子申す御子神ハ此ハ豊玉姫命坐るも

其、姓白蘇神國  
 子阿曇云々建海神  
 大和多都神三世孫  
 已都久命之後也  
 有、其子言ハル  
 此亦武子狀多神  
 台ありとも考合す  
 可

先ハ思へり一々も然ハ限らずて諸御子等を祀  
 此ハ故ハ唯御子之書一て一神の御名を擧がるも  
 子偕其御子神ハ古事記故阿曇連等者其錦津見神之子宇都志日  
 金折命之子孫也と有り又姓氏錄右京小安曇宿禰海神錦積豊  
 玉彦神子穗高見命之後也又河内國安曇連錦積神命  
 兒穗高見命之後也之有を以て宇都志日金折命穗高  
 見命同神子坐事を思之む可一上小記傳を引て註せ  
 るが如く宇都志ハ顯ろが予ハ心ハ不シ日金ハ多可一命ハ天皇御紀ハ強力毀角ノ有リ狀光金録ハ貫て  
 堅き金鐵を云ひ折ハ字の如く多可一命ハ天皇御紀ハ強力毀角ノ有リ狀雄一武一義  
 あり偕此子何の故を以て宇都志と云ふとありハ其



其より頭国の神  
と成坐て海の事  
預り幸れり一ハ即  
其名と成て安曇  
連と云事也成来  
る者なり

信濃の大高海ホタケの彼氷鉈郷と云邊ハ尤早き處にて其  
神の宮處ありけむを追ふ海ハ下り國ハ上り隨  
ひて高きハ山岳と顛ハ低きハ原野と成以て行て  
其凶宮即顛界ウツシクミ之成れを以て然冠カウ奉事ホセ事あり可  
一然ハバ穂高見命と申すハ却父大神の大海を所知  
者す其有るハ國ハ在ゆ湖水の限を主領す  
在す意の御名あり故一名の日金將命の武勇子依  
此名ありハ異ありて知べ又姓氏録河内國末  
定逆難姓ハ安曇連于都斯奈賀命之後也と有ハ記傳子  
奈賀ハ賀奈の寫誤ウツシクミ云ハ如何も然る言  
り又姓氏録右京神別青海首と倭八太との間ハ八太造和  
多罪豊玉彦命兒布留多麻命之後也と有る布留多麻  
ハ振玉子瑞珠盟約章子瓊響瓊と云が如く又豊

玉彦命豊玉姫姫命玉依姫命ふとの玉ありが此ハ玉を  
以て唯稱奉るあり才實ハ玉を以て奇異ある神業を  
成し給ふ事海宮遊行章を以知べ  
但此ハ宇都志日  
金將命あり別  
神ふら未得ハ思當るが有り倭此ハ一疑有り  
其前後ハ在る青海首推根津彦命之後也倭八太神知  
津彦命之後也と有り然るハ推根津彦命神知津彦命  
ハ同ト人あり此ハ決めて混れある有るハ知  
べりす倭八太を今本ハ倭太と作れども此ハ  
字を補ひて可き道あり有る其二氏共ハ太和神社子  
仕奉る大和宿禰の同族なり其思合せし事ハ神  
名式ハ路國三原郡大和國魂神社名神大と有ハ  
其大和國ありより支別なり御社ありハ太村と云  
ハ立せ給へるハ倭八太造ハ何れハ供奉仕奉  
布留多麻命の事ハ猶之難き所有るあり ○阿曇  
連ハ記傳六九六下ハ書紀應神天皇三年の所子十一月

○日本書紀傳十

○四百四十一



處、海人訕訕之不從命則遣阿曇連祖大濱宿祢平其  
訕訕因<sup>為</sup>海人之宰之有り又履仲天皇御紀不對曰淡路  
野島之海人也阿曇連濱子<sup>一云阿曇</sup>連<sup>里友</sup>云々有る此を  
も考ふ可し是れ海人を宰に<sup>連</sup>握<sup>里</sup>あり此氏ハ海神の  
子孫あり<sup>り</sup>固<sup>り</sup>海人の事を取<sup>り</sup>故<sup>に</sup>其訕訕を令  
平給ひ然其宰之為てハ愈其事を掌りつるを以て海  
人津持と負せ<sup>し</sup>か約りた<sup>る</sup>あり可し彼志訶の海人  
の名高きも此由あり可し又姓氏録ハ海犬養允海連  
あり有るも海人子依れ<sup>る</sup>姓あり可し云<sup>ふ</sup>と見えたり  
其大海宿祢ハ上<sup>四百廿</sup>七下<sup>廿</sup>志加海神社の下に引る風土

記<sup>上</sup>息氣足<sup>波</sup>姫尊幸於新羅之時御船夜時來泊此嶋有  
陪從名云大濱小濱云々と所見たり人少て其時未阿  
曇連と云ざるハ未其氏姓ハ無りつるを為海人之宰<sup>時迄未</sup>  
と有る其職に依て賜へる者あり可し然れハ其宰子<sup>海神の御末として其</sup>  
ハ任され奉りずと<sup>海神の御末として其</sup>虽も志加嶋小住居<sup>りければ自然不</sup>海人の長小  
て有け<sup>る</sup>を其時召れ奉りて中洲近く住む事ハ  
成ルり一者ありあり彼御紀に於是使吾免海人烏摩  
呂出於西海令察有國耶云々又遣磯鹿海人名草而令  
觀云々あり有る其群あり一ありむ吾免嶋に糟屋郡  
にて磯鹿子隣れ<sup>る</sup>を思ふ可し<sup>戸粟七子四可能白水</sup>郎乃釣船之綱云々又



和訓祭阿麻郡能...  
神の義多可...  
王初雨の時詠...  
行くと表...  
麻豆郡の神...  
大雨降...  
瑞球の塩...  
和年問左...  
津若...  
り云...  
り云...

公續紀小神護景  
云二年二月...  
己初准令以高  
橋安曇云二...  
内膳司者...  
奉膳具以...  
任之者宜...  
正と有

之加乃白水郎之塩燒煙と有り又神樂浪之思我津乃  
白水郎者と有る此神樂浪之と云ふ奈諸の同トきを  
以て近江の滋賀郡と馬ふ次大船振之母有奈  
年云こと有る歌を考合さざらば誤あり二子樂浪之志  
我津子等何と有ハ近江にて有べし十一子志賀乃白  
水郎之塩燒衣又牡鹿海部乃火氣燒立而鹽乃十二  
小思香乃白水郎乃鈎火有射去火之十五子之賀能  
安麻能一日毛於知受也久之保能又思可能宇良午伊  
射里須流安麻と塩を燒も魚を為るも鈎為る  
もも名高きハ全阿曇連の速祖より代々其地に住て  
然る業子巧いふ高橋氏文子引々延暦十一年官符子  
謹案日本紀云々及輕嶋明宮御宇譽田天皇三年夏二  
海人訛詭之不從令乃遣安曇連祖大濱平之日為海人  
之宰是安曇氏預奉御膳之由也と有れハ其より海人  
の宰子供奉り兼て御贄の事子預り仕奉れり一者不

其より高橋朝臣と相並びて六月十二月神令食十  
仕奉れり神類史云延暦二年三月壬申内膳司是六り神令食  
位上安曇云伯祢延成於佐渡國初安曇云高橋二氏常爭供  
奉神事行立而後是日因降司謂新羅之日有初鹽次安曇宿  
橋氏為前而延遵詔旨背職出去憲司請誅之特  
有思旨以滅死は有て地持の家大小養を然れ自神其次弟  
ハ類本の住地膳司高橋朝臣一人執鮫汁漬次之安曇宿祢  
一人執海藻汁漬次之と有て神饌を供進れり中ハ  
尤重き職掌ふを知べし然れハ右引る記傳の説の  
如く阿曇ハ海人津持してハ海人ハ御饌の御贄を  
取て貢奉る者ふハ然らず意はて有べし但上子引り  
大平主説ハ阿曇ハ預海ハ海の事を預り掌る申ふり



和訓祭向麻郡能...  
條下琉球國...  
其神名...  
海豆都...  
神の義...  
王初...  
行くと...  
麻豆都...  
大雨...  
琉球...  
和年...  
子澤...  
り云...  
り云...

之加乃白水郎之塩燒煙と有り又神樂浪之思我津乃  
白水郎者と有る此神樂浪之と云ふ奈諾の同トキを  
以て近江の滋賀郡と馬ふハ次ハ大船奈振之母有奈  
年云こと有る歌を考合さざらば誤ふりニ奈浪之志  
我津子等何と有ハ近江にて有べし十一子志賀乃白  
水郎之塩燒衣又牡鹿海部乃火氣燒立而奈塩乃十二  
子思香乃白水郎乃鈎奈燭有射去火之十五子之賀能  
安麻能一日毛於知受也久之保能又思可能奈長年伊  
射里須流安麻亦と塩を燒も奈魚を為るも鈎為る  
もも名高きハ全阿曇連の速祖より代々其地に住て  
然る業子巧奈ふ高橋氏又子引る延暦十一年官符子  
謹案日本紀云々及輕嶋明宮御宇奈田天皇三年處ニ  
海人訛訛之不從命乃遣安曇連祖大濱宿祢平之日為海人  
之宰是安曇氏預奉御膳之由也と有れハ其より海人  
の宰子供奉り兼て御膳の事子預り仕奉れり一者不

公續紀小神護...  
云二年二月...  
神今食十  
儀行立次第...  
祢一人...  
也云...  
一人執海...  
尤重子職...  
如く阿曇...  
取て貢奉...  
大平主説...  
○日本書紀傳十  
○四百四十三

其より高橋朝臣と相並びて六月十二月神今食十  
一月新嘗等の神饌子預り仕奉る由所見たり神今食  
儀行立次第子次内膳司高橋朝臣一人執饌次安曇宿  
祢一人執海藻と書され大嘗祭儀とも同ト其次第  
也云ハ内膳司高橋朝臣一人執饌汁漬次之安曇宿祢  
一人執海藻汁漬次之と有て神饌を供進れり中ハ  
尤重子職掌ふを知べし然れハ右引る記傳の説の  
如く阿曇ハ海人津持トてハ海人ハ御饌の御贄を  
取て貢奉る者なりハ然らば意にて有べし但上子引る  
大平主説子阿曇ハ預海子海の事を預り掌る由あり



と云ふも亦難捨り可一後人能定めてよ預と云事ハ仁徳天皇御紀子額田大仲彦皇子將掌倭也田及屯倉而謂其也田司出雲臣之祖源字田是也田者自奉山守地是以今吾將治矣不可掌云云於是源字宿祢啓大鷦鷯尊曰臣所任也也田者大仲彦皇子距不令治云云也有祈任の二字を阿豆加礼苗と訓み是は其司として供奉するを云ふなり然して其所任の言は當りて掌とも治とも有りて其同ト義ありを見ふ予預海の説得たる如し其ハ天皇の魚塩を奉る海を預りたるも也田を掌り治む又記傳に此氏ハ連の姓と有るを天武天皇御紀に十三年十二月戊寅朔己卯阿曇連賜姓曰宿祢と有り持統天皇御紀五年八月己亥朔辛亥詔十八氏上進其祖等纂記と有り中にも載れり有りり姓氏録右京神別に安曇宿祢海神綿積豊玉彦神子穂高

見命之後也と有る是あり然るも同書河内国に安曇連綿積神命兒穂高見命之後也又河内国本に安曇連于郡志奈賀命之後者と有る此二ハ猶連姓ありハ氏上ハ再了宿祢の姓ハ賜ハれりあり此安曇連の下の穂高字今本に無る穂高が按本に依て引ふり宿統紀慶雲元年の下の阿曇連虫名養老七年に阿曇宿祢坂持神龜四年に阿曇宿祢刀天平十七年に阿曇宿祢大足ふと云人名見元和銅子撰に古事記に安曇連養老に奏れり御紀にも猶連の姓あり如何と考ふに宿祢ありは連の方の廣りあり可やく又右の安曇宿祢と並びて海犬養海神綿積命之後也見え又攝津国に海連安曇宿祢同祖綿積命六世孫小栲梨命之後也又阿曇犬



養連海神大和多羅神三世孫穗已都久命之後也ふと  
し所見たり此穗已都久命ハ三世孫と有ルハ海神よ  
り計へて其子宇都志日金折命亦云穗高見命の子あり事上  
ヨ云り其小栲梨命延暦十一年官符小大栲成吹と  
云人の事を崇神天皇御世の人ふと申云ルハ其子小  
栲成命あり可し斯ルハ成吹の吹ハ次を誤ル事也  
其小栲成小對へて大栲成次あり可し和名抄小栲津  
國西成郡安良郷と有るハ安曇郷ありけしを誤ル事  
一者と見ゆ備凡海と云ハ大海部と云事して國  
海部共の貢奉を御贄物を其津國に聚めて京に運奉

念ハレハ何時モ  
海連と有る

る司あり一謂ふ可し所以右の天武天皇十三年  
の度にも同トく宿祢の姓を賜ひて其家柄も一等重  
りり一者あり 統紀大寶元年ハ凡海宿祢と云人  
ルハ押海とも書たり一ハ其同ト人を養老三年  
子ハ思海連人成也有り宿祢の姓右京未定難姓  
凡海連大明命之後者と有る連の姓ハ今ハ何ル  
を何ルとも分つ事難う可し又天孫本紀ハ天火明  
日命十世孫淡夜別命大海部直祖と見えルハ右の  
未定難姓なるハ凡海直と云可きを連と云が不審  
くて其子出たりあり可き ○連の姓の事ハ記傳六  
ハ二連を牟良自と云ハ万葉八子中臣朝臣武良自統  
紀九子紀朝臣牟良自と人名字も見えて群主の意  
り主を自と云ハ宮主を美夜自戸母をカ自主を阿流



多し神宮の宮  
堂大なりと云  
有るも思合す可  
し又

自と云る是より群主ハ其群の中の主と云意ありと  
有り故思ふに連の群主あり然る言ふく其自  
知の義にて其所卒て仕奉る群を知り由あり可然  
ハバ右の宮主ハ宮堂よりト部の長上ると大宮子親  
しく仕奉るを云ハカ母ハ後知りて謂ゆる後の政を  
當り由より主ハ在知りて其家ハ在て萬事を當り謂  
ありを以知べきあり 志理を志し約云例ハ出雲神壽  
と云見え大被詞ヲ蓋物と云ハ麻自利臣能礼自登云  
美奈末年良自加也 諸記傳ヲ引ルル万葉世多  
と續けつと有れども此ハ記傳ヲ編連る意にて有  
べしと云ハた多し固き連字ハ谷川士清説ハ礼記王  
制ヲ十國以爲連有即云注ハ合十國爲連比有即

神  
公の事ハ竹田川  
仁徳天皇御世大  
和國十市郡刑川  
之邊有竹田神社  
以爲氏神曰居住  
焉と有る是より  
神即祖神の

以統之也と有り此を取らざるあり然も有べきカ  
群主の意即彼連師帥似たりと記されたりキ ○古  
事記子此三柱綿津見神者阿曇連等之祖神以伊都久  
神也と所見なる祖神以伊都久天孫本紀崇神天皇八年御子天皇  
以大田根子令祭大神云今三輪君等之始祖也  
有る如く子孫よりて其祖神子仕奉るを云あり又姓  
氏録賀茂朝臣條子大田、祢古命孫大賀茂都美命奉  
斎賀茂神社也と見え又吉野連條小加弥比加屋之後  
也云今吉野連所祭水光神是也と有る類して中古  
子謂ゆる氏社氏神之事あり 但氏神と云も古き名目  
命條子遷建布都大神社於大倭國山邊郡石上邑則天  
祖俊饒速日命自天受來天璽瑞室同共藏斎號白石上

○日本書紀傳十

○四百四十六



大神以爲國家亦爲氏神崇祠爲鎮と有也其祖子饒速  
日命を祀り祖神と仕奉ル云云今俗に其産  
地神を氏神と云ふ異よて正し其家の  
祖神子社を定めて祭ル是即氏神なり記傳六十  
六子祖神ハ意夜賀微と訓べし凡て上代ハ父母子限  
らず幾世もても遠祖迄を通ハして皆唯意夜と云り  
其證ハ古書子數多見ゆ父母ハ其意夜の中の一也亦  
るが有が中子近く親しき故に殊に其稱を專て負て  
後子ハ意夜と云へば唯其父母耳の名に成化リし  
リ故古書ハ祖字を意夜と訓て親の事も用ひ  
り意富、<sup>遲</sup>意富遲ふと人事を分て云時の稱も  
想てハ何れも皆意夜なり書記ハ遠祖上祖本祖始

祖ふと書て登富都音夜と訓り此も古稱よて万葉十  
八子遠津神祖ふと有り然れど此記ハ何れも祖と  
耳有て遠祖ふと書る事一も無レバ唯意夜と訓む例  
あり然レバ上代ハ其姓の本祖と云をも唯意夜と  
不云けし又子と云も已が生子子限らず子孫迄  
係て云孫ありと有ハ実子可美説子多し有けり其ハ  
皇七子御紀ハ天神御子と申奉るハ更あり彼崇神天  
と宣へる其大田根子ハ其一世孫ありを吾兒と宣  
へるあり唯子と云名の幾代も直るを以て意夜と  
云稱の幾世の先ありし〇又同記子故阿曇遲等者  
其津見神之子宇都志日金拆命之子孫也と有り記





傳六七十 小子孫ハ須惠と訓べ一獲栗宮改小表祁命  
 の押齒王之末奴と名告給へる末ハ子孫の意あるハ  
 り此ハ其ハ其御子とて子孫ハ非ぬと言ハ子孫と  
 云事あり書紀ハ御ミ裔スエ僕ツラヒと有り是ハ依て某之子孫  
 あり有とバ皆須惠と訓べマあり中昔ハ今も然云不  
 り書紀ハ宇美能古と訓ハ子孫八十連属又生兒云  
 生子云々書此も訓ハ正しくハ万葉二十 十宇美  
 乃古能伊也都藝都岐尔ふど有ハ依れり然れど此ハ  
 子孫の末ハ末追係て云時の称子ころ有ハ唯某子孫  
 あり有と然訓ハ如何あり凡ての称ハ此の如き差



